稼堂叢書

第一冊　神樂評註　他五

156
113

156-113
1200901380856

稼堂叢書

神樂評註　後百人一首二種
催馬樂評註　自讃歌註
萬葉百首短評　刪修君臣歌

156
113

稼堂先生之筆蹟

帝國圖書館藏

神樂評註

神樂評註緒言

神樂は、公事根源に、神樂は天照太神の天の岩戸をさして籠り給ひし時、諸神だちの祈り申されたるに、天鈿女ノ命まさきのかづらをかづらとし、ひかげを手すきにして、うたひまひ、庭火をたきし古事より始まりし事なれは、我朝の風俗、神代の縁起、他に異なるへきにやと見えて、我邦の舞樂なり、舞樂を、むかしは、只あそびとのみ云り、故に古書にあそびと云ふは、みな歌舞してあそべるなり、この風は、中古までもしかりしと見えて、その頃の物語にも、この詞見えたり、故に神前にての歌舞を、神あそびと云るに、神樂の二字をあてたり、そもそも神あそびのらくといふを略して、神樂と書きたるならんもしるべからす、それをかぐらとよめるは、かむらくといふ詞の轉略なるべし、むとくとは横通也、されば、かぐらとよむもよく、神あそびとよむもよし、たゝ樂の字をあてたるは、延喜以後の事なるべし

さてこの神樂の樂章といふものは、神樂譜に、延喜廿一年勅定と見ゆれは、その頃に至て、

朝野の歌をとりあつめられて、さて今の神樂の歌曲とはなれるなるべし、その歌曲をうたふには、座を兩段にまうけて唱和する、その唱を本とし、和を末としたるなり、本文に見えたる本末は、それを云ふ也、又採物とて、手にとりてまふ物あり、榊、幣、なとの類也、是も本文に見えたる物、それ也、すべて舞ふには、手草（たくさ）なくては舞はれず、天鈿ノ女命のさゝを手草にとられしも、その故也、またこの樂曲に、阿知女といふ作法あり、あちめとは、鈿女の轉にして、たはれてわらふさまなるは、今の狂言の体なり、この外、色々の作法あれとも、今その樂章をさたして註せんとの意なれは、これにあつからぬことは、すべて他の書にゆづりて註（しる）さす

神樂は、祭祀の樂にして、その種類をいはゞ、人長神樂、陪從神樂、恒例神樂、殿上神樂、臨時神樂、里神樂、山神樂、夏神樂等なり、かの內侍所の神樂は、十二月にして、一條院の御時より始りき、と次第に見ゆ、さて樂章の今の次第は、男山神樂の次第なるよしなり

神樂評註

榊

本

榊葉の香をかくはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりける　まとゐせりける

榊は、櫁（しきみ）をいふ也、かぐはしみは、かくはしさに也、とめは、もとめ也、もとめは、とめにもの美稱を加へし也、なかに、もを加へて、もなかといへるかごとし、八十氏は、多くの氏子也、かくはしみにて、榊の多きを寫し、八十氏人のまとゐせりけるにて、里神樂のにぎはしきを寫せる、歌文の映寫法を悟るへし

末

神垣のみ室の山の榊葉は神の御前にしげりあひにけり　しげりあひにけり

神垣は、齋垣（いかき）をいふ、御室は社也、神の御前に榊葉の茂合にけりといふにて、神社のこゞしきさまも、きよらかなる樣も、宛然目にあり、巧を求めすして、巧その中にあり

本

榊葉に木綿とりしでゝ誰か代にか神の御室と齋ひ初めけん

或本に、神木歌とあるよし、榊葉に木綿とりしでゝ、その木を神としてまつれるなり、今俗に、榎の荒神、椎の明神などいふ類なり、是やがて上古の神社にして、後世の如く、神社をたてゝ祭れることはなかりしなり、神社をもりといふも、その事なり、しでゝは、たれて也、是類も、上の榊の本の歌と同し巧にして、その社のいたりて古きよしを寫せるなり、かの詩に、誰知、何處、不知などの文字を用て、意味を深むると同しく、誰か代にかといふにて、いく千年の代にかといふ意見えて、その神のふるきさま見ゆるなり、歌よむもの、この處を悟らば、歌もおのつから手に入りぬへし

末

霜八度おけど枯せぬ榊葉の立榮かゆへき神のきねかも

霜八度云々は、榊の序也、榊葉云々は、神の木の序也、きねは、木根にて、根はかろくつけたるまて也、大和島根などいふ根のごとし、このきねを、巫子をいふといふ説はわろし、巫をきねといふは、祈念の音をとりてつけたるにて、抑後の訓也、しかるを巫子とみるは、榊葉と重なるとおもへるなるへし、重ねていへるにあらす、さかきはさかき也、さかきをとりしは、榮ゆへきといはんとて也、その神の木は、何の樹にても、神前にある木をさすなり、神のます所としてまつれるは、みな神木也、或本に、神木歌とあるも、その意也、是本末ともに、神木をよめる也、本の歌には、既往の久しきをいひ、末の歌には、將來の長きをいふ、二首相配して趣をなす、妙也

幣

本

みてくらは我かには非す天にます豐をか姫の宮のみてくら　宮のみてくら

とよをか姫は、とようけ姫を申す也、をか うけ 音通なり、今の伊勢の外宮にいはひまつれる神也、みてくらは、幣を云、幣をみてくらといふは、下の歌にも云るごとく、御手座(みてくら)の義なるへし、くらは物をいふ義なれは、みてにとり給ふ物にて、御物也、その御物となる物を献れる也、下の歌は、必古傳なるへけれは、その歌によりて此詞を解くへし、

他の註は、皆取るにたらす、みてくらの詞、首尾におきて、常山の蛇勢をなせる、亦一格也、はたまた、此歌、幣を我物とせざる、只幣のみにあらす、何物にても、神の御物として、その徳を仰き奉る、皇道の存する所也、輕々に看過すへからす、

末

みてくらにならまし物を皇神の御手にとられてなづさはるべく　なづさはるべく

べくあればと、上にかへるを、へくととめたる也、是れ敬神の意をよめる歌なれとも、敬神の道は、仕君の道なり、臣の君に仕まつるも、人の神に仕まつるも、つゆ異ならさるは、我國の大道なれは、此歌移して奉公の訓とすへし、なつさはるは、なつきそはるの略なり、

杖

本

此杖はいつこの杖ぞ天にます豊をか姫の宮のつゑなり　みやのつゑなり

自問自答の歌なり、下の句、かみの杖とせるあるはわろし、是は今手に持てる杖は、神

宮に納むる杖なりと云るなり、

末

大坂を今朝越ゐくれは山人の我にくれたる山杖そこれ　やまつゑそこれ

万葉廿、山村にみゆきましゝ時の歌二首、先太上天皇云々、御口號に、「足引の山ゆきしかは、山人の我に得しめし山包（つと）ぞこれ、とあるによく似たる歌なり、この歌の作かへにてもあらんか、さるにても、この歌は、奈良朝の頃の作と見ゆれは、大坂は大和國葛上郡大坂ノ山口ノ神社とも神名式にありて、大和の大坂なり、諸本に逢坂とあるは、平安の朝に至て、この歌を近江の逢坂にての歌としたるなるへし、下の句も、一本に、千とせつけとてくれし杖也とあるも、同し頃につくりかへたるなるへし、山人を仙人とみたる故、千とせと改めたるなり、さらは逢坂も仙人によしある山に改むへきを、よのつねの逢坂にしたるは、仙人にあひてとの意にてもあるか、さるにても、上に何のかゝりもなくて、下にくれし杖なりと斷りたる、前後かきあはぬ歌となるなり、猶もとのまゝにてよき也、この歌、大坂といひおこして、さかしきさまをみせ、そのつらさをみかねて、

山人のわさわさきりてくれたる杖はこれぞと云る、實情のありのまゝ寫して、その艱苦言外にあり、杖もよのつねの杖にはあらす、山中のけはしきにつく山杖と云ふ金剛杖なるぞとなり、大坂、山人、山杖、三處照應、今朝とあれは、人にあひしは、晝かゆふかたか、汗拭ひつゝよみ出たるさま、見るがことし

本

足引の山をさがしみ木綿つくる榊木の枝を杖にきりける

榊は、神木なれは、神の力をからんとて、その枝を杖にきりけるとなり、さがしみ、一首の主眼也、諸書の註、みなわろし、一本にきりをつきと改めたる、乃ち庸筆

皇神のみ山の杖と山人の千とせをいのりきれる御杖ぞ

杖としての意也、千とせは、皇神の也、しづ山がつの敬神に深き、寫得て妙也

篠

本

此篠はいづこのさゝぞ天にます、豐をか姫の宮のみさゝぞ　みやのみさゝぞ

上の杖の本歌と同一の筆墨、一本に、このさゝは、いつこの篠ぞ、とねりらが、腰にさがれる、鞆岡のさゝ、とあらためる、是金を化して鐵となせるもの、舍人をとねりといふ、鞆岡は、枕草子にも見えて、山城國乙訓郡の地名にて、さゝの名所也、平安の朝に至て、かくはよみかへたるなるへし、腰にさがれる、何ぞ鄙陋なる、神樂の歌に、この鄙陋を許さんや、すべて、後世の歌は、巧を求めて巧いたらす、古人の歌は、巧を求めすして巧いたる、右の歌も、舍人は衛府の舍人にして、皆腰に鞆をさけたるものなれは、さゝの名所に鞆岡をいだし、鞆につきて、とねりらがといひかけたる、こゝを巧としたるものなれとも、たくみたるほど、その調のいやしくなるをしらす、前のはかうやうの巧なくして、神あそひの趣、それとしらるゝ、調の高き所以なり、學者これを察すへし、

末

さゝ分けば袖こそぬれめ利根河の石はふむともいざ河原より　いさかはらより

利根河は、上野國利根郡にあり、その所の人のよめるなるへし、それをこゝにとれるは、たゝさゝといふ詞のあれば也、さてさゝは、水分くる時の速きをいふ也、今もさつさと

ゆくなといふ、それ也、さゝと水分てゆかは、袖こそぬれめども、その方はやけれは、利根河の石はふむとも、いざ河原よりゆかんと也、さゝ、いざ、上下相應して趣あり、篠原文には、ぬれめをやれめとしたるは、ぬをやにあやまれる也、さゝを篠として、篠原を分けは袖こそ破れめどもといふ意ならは、下の句に、さゝの事をいふへきなり、袖こそぬれめとのかゝり結を、鮮分けぬ故、この歌、全篇瓚々、利根河の石、全首の骨子にして、下、いざかはらより、さゝわけば、とよみかへる也、

本

篠の葉に雪ふり積もる冬の夜に豊の遊をするが樂しさ

豊の遊は、神樂をさせると見るも、難なけれとも、全篇の趣よりみれは、やはり宴樂を豊のあかりと云へは、豊のあかりの遊なるへし、寒夜に宴樂して、神酒を賜はる、げにも樂しきよし也、ふりつもるといひて、夜の極て寒きを寫し、豊のあそひといひて、さかもりのたけなはなるを寫せる、天然の巧みなり、

末

瑞垣の神の御代より篠の葉をたくさにとりて遊ひけらしも

瑞垣は、久しきの冠詞也、神代は久しき上つ代なれは、神に冠らせる也、たくさは、手にとれる草也、鈿女ノ命の故事にて、今もとれる也、一本に、たふさとあるも、後の轉なれども、意は同一に歸す、ふさは、すへてふさふさとたるゝ物をいふ詞なれは、さゝの類の手にとれるをも、たふさといひつへし、みつかきの云々、あそひけらしもと相應す、

高調絶世。長松無レ枝。

弓

本

弓といへは品なき物を梓弓まゆみつき弓品こそありけれ 品こそありけれ

品こそありけれども、と上の句にかへりてこゝろうへき也、理りは一にして、分は殊なり、分は殊なれとも、その理りは一つなり、この類、萬の事にたとへつへし、品なき、品あり、上下相對す、弓の字を四つ疊みて、種々の弓あるさま、詞の中に見ゑたる、いとよし、

末

道のくのあたちのま弓我引かは、やうやうより來しのひしのひに　しのひしのひに

あたちは、陸奥の安達郡也、そこより眞弓をいたしゝ也、一本に、あづさの眞弓とあり、梓と眞弓とは、材も異なれは、梓の眞弓とはつゝけいふへきにあらすといふ説は、頑くなゝり、眞弓の眞は、美稱也、檀の木をまゆみと名おふせたるは、弓材に尤もよき材なれはなり、眞弓は、よき弓の總稱也、されは梓にて作りしよき弓を、あつさの眞弓とはいへる也、その木につきていへるにはあらす、されと、この歌は、古今にもいてゝ、あたちとあれは、それに從ておくへし、是は戀の歌にて、上はたとへ也、やうやうは、やゝやゝの音便、よりこはよりこよ也、こよといふを、今もたゝこといへる、むかしよりの事也、よの詞をつけすは、格にはづるゝやうにおもふは非なり、我、そこもとを引かはしのひしのひにやうやうとわがかたへよりこよと也、ひく、よるのもじ、一首の精神、

本

さつをらがもたせの眞弓奥山に御狩すらしも弓のはづ見ゆ

さつは、さちと通して、山のけものを、山の幸といふ、それをとるものをさつをといふ、後世の狩人也、薩摩の國名も、さち人の守る島の義也、薩摩の人は、今に狩を好めり、もたせは、人にもたする也、御狩は、その狩を尊みて云ふなり、是にてこのさつをの貴き人なることをしらするなり、家の子に弓もたせて、狩にいてましゝを、しづのをの望みてよめるなり、徳川頃の御鷹野をもて、この歌のさまおもひやるへし、諸註みなあたらす、もたせ、みかり、相呼應せり、弓のはづ見ゆ、見るがごとし、

本

いいいいいいいい

よもやまの守りに賴む梓弓神の寶に今しつるかな

よもやまは、よもやもの義也、も、ま、音通也、梓弓を神寶として奉納し奉るを云る也、兵器をもて神を祭り、その庫中に納奉りおくは、我國尙武の風也、尊むへし、

末

梓弓はるくるごとに皇神の豊のあそひに逢はんとそ思ふ

冠詞に梓弓とあるによりて、この歌は取れる也、春の神事に、ゆく末をいのりし也、調

めてたし、

劍

本

白金の目ぬきの太刀をさげはきて奈良の都をねるは誰か子ぞ　ねるは誰が子ぞ

目ぬきは、今の刀の目ぬきにあらす、刀の柄頭或るはこじりに、穴あけて、緒を長くたる、その穴を云なり、かの小さ刀といふものゝ製、その遺なるへし、小さ刀は、紉刀とも一名云り、さげは緒をさぐるなり、ねるは、今もいふ詞にて、體を左右にゆりてゆくさま也、長安の貴公子がすがたを見て、かたへゆく人のとがめたる趣なり、いにし奈良の都の士の風、寫しえて目にあり、子といふにて、貴公子なること、しられたり、

末

石上ふる屋男の太刀もがな組の緒しでゝ宮路かよはむ　みやぢかよはん

石上は、ふるの冠詞、ふる屋は、大和の地名なり、その地の士は、みな勇武にして、常に太刀はきて、一種のいかめしきすがたして、ありきしなり、それをうらやみてよめる

歌なり、難波の頃には、難波男といひ、德川の初には、三河武士といひ、明治の世には、九州男子なとゝいひて、その武勇を稱したる類也、されは古屋士は、奈良朝の人に尤も美まれし士にして、本歌の白金のたちはきてねりゆきしも、この士どもなるへし、宮路は都の大路をいふ也、万葉十六に、虎に乘り古屋をこえて青淵に蛟龍(みつち)とりこん劍太刀もが、とよめるによく似たり、唐詩に、長安少年無㆓遠圖㆒一生只美執金吾とつくれるにも、ほゞ似たり、されとも唐詩は、遠圖なきをそしれるなり、これは古屋侍の武勇をしたひしなり、和漢の人情を見るへし、

本

齋(いはひ)こし神は祭りつ明日よりは組の緒しでゝ遊べたちはき

いはひこしは、昔の人にかけて云る也、たちはきは、武士をいふ也、たちはける故也、後、たてわきといふは、これを訛れる也、たちはきに、明日よりは、おのがまゝに遊べと許すよし也、昔の人の神事におごそかなりしさま、この歌にておもひやらるゝ也、此歌、上句は今日の事、下句は明日の事、結句たちはき、筆力勁健、

末

おきつきにすゝめ神たちを齋ひこし心は今ぞたのしかりける、

おきつきは、おくつきともいふ、奥ッ城（おくき）の義にて、墓をいへとも、この歌によれは、社をもいふなること明けし、神たちとあれは、この祭は、合祭也、諸神たちをまつりをへて、心もすがすがしくなりぬるさま也、げにも神まつりし後ほど、心すがすがしきことはなき物也、神たちを神太刀と心えてとれる也、上の篠の末歌に、さゝといふ詞を、篠にとりなして引けるに同し、

桙

本

此桙はいつこのほこそ天にます豊をか姫の宮の御ほこそ　みやのみほこそ

是も、上の杖の歌に同し、二ののもじ、面白し、念入れとへる故、また念いれて答へたる体也、

末

よもやもの人のまほりにする桙を神の御前にいはひ立たる　いはひたてたる

是も上の弓の歌に同し、まほりは、まもり也、音通也、結句は立たるよとの意を含めたる也、よもやもは、坊本によもやまとあり、同しきこと、上に云り、

杓

本

大原やせかゐの清水瓢（ひさこ）もて鳥は鳴くとも遊ふ瀬を汲め　あそぶせをくめ

せかゐは、せきゐ也、かき音通也、せぎたる水の義也、すへて用水をゐといふ、このせきゐも、灌漑の爲めの用水也、大原のせきゐは、清瀧川の末、水尾の清水也と云り、後世せがゐに清和井とあてたるは、清和天皇の御廟の井となれる故也、せいわをつめて、せわといへばなり、瓢は、杓にいにしへより用ふ、されとも、その初は支那の風をならひしなるへし、この國の用初めたる物にはあらすかし、さてこの神樂の採物に用ひしは、鎮火祭の祝詞にも、ひさごを引けるが如く、庭燎をたける故なるへし、ひさごを、後、ひしやくと訛れりと云り、げにも杓の音にはあらざるべし、下の句は、水をくみて、鳥

のなくとも、そのあそべる深き清き瀬の處をくみて、神に献れと也、清潔は、神に仕まつる道なれは、かくいへる也、古今六帖に、「大原やせがゐの清水、ひさごもて、鳥はなくともあそひてゆかん、とありて、もと納凉の歌なれは、鳥は曉の鳥なるを、こゝにいさゝかかへて、鳥も水鳥としたる、かの詩に云る斷章取義にほゞ似たり、清水の清、あそふ瀬の瀬、相映してその清冽を寫せる、いとよし、

末

我か門の板井の清水里遠み人し汲まねは水さびにけり　みづさびにけり

幽居岑寂の狀、寫しえて絶妙、且この歌甚深の理あり、萬事にたとへつへし

葛　但し今の世に用ひす

本

わきも子が穴師の山の山人と人もしるへく山かつらせよ　やまかつらせよ

わきも子は、吾妹子の義也、この詞、こゝには通せす、古今集に卷向のとあるかたよし、卷向、穴師、いつれも大和國城上郡なり、垂仁帝の頃に、天照太神を磯城ノ岩橿ヶ本に鎭

めまつりし事あり、その頃の神事によめる歌なるへし、人もしるへくも、古今には、人もみるがにとあれど、是はいつれにてもよし、山かつらは、日蔭かづら也、神事に仕まつる人に、日蔭かけて、それとしらるゝやうにと告たるよし也、

末　但し庭火唱ふに

み山にはあられふるらしと山なるまさきの葛色つきにけり　いろつきにけり

と山は、門山の義にて、入口の山也、奥山に對する也、み山はやかて奥山也、下の句の色づくを見て、上の句のあられをおもひはかりしなり、歌はかくよみて、意味悠長、味盡くへからす、細註庭火に唱ふるは、上の篠の本歌、さゝのはにゆきふりつもる冬の夜にの意と同しく、庭火をたきてあそふ折なれは、火に當りて、おく山のあられふるけしきをおもひやるこゝろなるへし

韓神

本

三島木綿肩にとりかけ、我韓神のからをきせんや　からをきから

三島ゆふは、伊豆國の三島より出つる木綿也、韓神は園神韓神とありて、このから神は、大年神の御子也、件の神を二座、宮内省に祭給ひしは、野菜薪炭の神を祭給ひしなり、園神は、野菜を掌給ふ神、韓神は薪炭を掌り給ふ神なり、韓は借字にて、材幹(から)の義也、大和に都し給ひし時も、この二神を祭給ひしこと見ゆ、さて天皇のきこしめす穀物野菜は、御料内より出で、宮中に用ひ給ふ材木薪炭は、御料林よりいづ、故に御料林のある所には、必韓神を祭給ひ、御料田のある所には、必園神を祭り給ひしなり、延喜式に山口の神を祭給ふ祝詞のみゆるは、即この韓神を祭給へるにて、御年の神を祭り給ふ祝詞のみゆるは、即かの園神を祭給ひしなり、故に園神は、大年の神にして、韓神はその御子にてます也、からをきは、材幹即材木薪炭なとの多く出づるやうにといのる、それを體言になして、からをきとは云る也、をきは、招禱の義なれとも、たゞ禱の意にもなる也、賀茂氏以來、諸註紛々たれとも、みなかゝはる所ありて、却て歌意をえざれは、とるにたらす、歌の意は、我み島木綿を肩にとりかけて、けふはから神の御前にて、からをきの祭せんとなり、意甚明なり、

末

や平手を手に取持て、我から神のからをきせんや　からをきせんや

歌意は、右に同し、やひら手は、柏の葉を何枚も、竹のくしにてさしぬひて、神饌を入るゝやうに作れる器なり、それを手にとりてまふも、からをきの手草と見ゆ、

或説

本

我生(わかあれ)は皆人しらす父がかた母がかたとも神はしるらん

我生は、生のすぢをいふ也、世の人は、父か系の姓とも、母がかたの系ともしらねとも、神はしり給ふらんと也、から神に仕まつる神部のよめるなるへし

末

皆人のしてはさかゆる大直びいさ我かともに神の酒(さか)まて

皆人は、一本に、宮人ともあり、宮人をみなとさしていふ也、しては、大直ひをしてなり、大直びは、大なほらひとおなしく、まつりをはりて後、宮人のうちとけて、さかも

りする也、してはのはもじは、毎年してはさかえ、さかえてはするの意を見せたるにて、いつもかはらす、このまつりするよし也、わかともは、わか友となりての義にして、一同にといふ也、神のさけをさかといふは、酒をのみてゑみ榮ゆる義也、すへてさかゆるといふ詞は、色のてりてりするをいふ也、朝日のてりわたるを、豊榮昇るといひ、酒のみて顔の赤らむを、さかゆるといふ、上の榮ゆるといふも、その意なれは、酒をさけといはすして、さかといひて、上下相呼應せしめたる面白し、尤も酒をさけといふは、さかえの約なれは、こゝはさかえのえをはぶきしにて、さけといふ詞の本也、さけをさかつき、さかふねなといへるなとの連聲よりいへるにはあるへからす、歌の意はけふは大宮に仕へまつる皆人どもの、いつもまつりしてはゑみ榮ゆる大直會の日なれは、氏子どもゝ、いざいざ我友となりて、神の酒いづるをまちて、心よくさかもりしてよ、と氏子ともにも、宮人のさそひ催すよし也、坊本に、さかまてを、さかもとにとあり、またさかもとれとゝあるよし、橘守部の入綾には、これに付て説たてたれ共、みなあたらす、その他の註もわがといひ、ともといふにかなはす、ひがこと也、さて此歌を、から神に

仕まつる神部のよめるにやあらん、是にて神樂の歌は終はれり、

大狹居張

按に、坊本には、大前張とかけり、是は誤なり、今熊谷直好が梁塵後抄に引ける、博雅三位の二男、雅樂頭信義の自筆本、左近衛將曹八俣部宿禰重種の譜本によりて、件の字を用ふ、そのよしを説明かさんに、此狹居張を、大小に分てるは、正しく延喜の御世に至てかの詩の大雅小雅に傚ひし也、またこの狹居張も、後の狹井張も、みな神樂の章に比へ見るに、歌のさま、いたくひなびて、風俗のふり也、その中に、雅に近きを大狹井張とし、遠きを小狹井張としたるものにして、その趣全く詩の大小雅に同し、是れ大小に分ちたる故よし也、さて狹井張とは、狹井風なり、これに付て按ふに、張の字は、振の字を書あやまりしなるへしともおもはるゝ也、されども、件の信義自筆の本にさへ、この字を用ふるをみれは、もとよりこの字を用たるにてもありつらん、さるにしても、はりふりは、音通にてあれは、その義はふりにて、ふしの事なれは、狹井風の意なること明也、抑、狹井風とは、大和國狹井といふ所にてうたへる歌の風

なり、狹井は、大三輪神社の北方に、今に狹井社ありて、その所をながるゝ河を狹井川といふ、即神武天皇の皇后のすみ給へりしは、この河邊にてありしこと、古事記に見ゐたり、この邊は、大三輪神社の神領にて、ゆかりのある所なれは、風俗もはやく開けて、その地にうたへるさまも、おのづから雅に近かゝりけん、されはその所の歌をまづとりて、さらにその他の歌をも、その歌のふしにうたひしからに、かくは狹井振とは名つけしなるへし、すへてその所々の風俗歌を、何ふりと云ることは、東風甲斐振(あつまふりかひふり)なといへる類にて、今ならは、追分ふし、新潟ふしを、むかしはみなふりとも、はりともいひけるなり、今一ッの考へは、この狹井張の初にのせたる、宮人の歌も、正しく件の大三輪の神宮に仕まつる神主の姿をよめる歌にして、その歌は、その所の人のうたへるによりて、かくは全篇の大名にもおふせたるにてもあるか、かの催馬樂も、その初めに、載せたる歌の詞の馬催す詞なるによりて、催馬樂と一編の名に負せたるの類とみれは、さるよしにもやあらん、いつれにしても、三輪の狹井河あたりの曲なること、何の疑もなかるへし、しかるを坊本に、篇中前張の名あるによりて、さゐは

りを、さいはりとよみて、終にこれをも前張とかきけるを、一條禪閤の抄にさへ、前張は、一曲の名なるを、惣てにわたりて大小と名付かへたる、いと覺束なしなといへるは、右の考におもひいたらざりし故にして、その誤もまた久しきことゝいふへし、いかにも一曲の名をもりて、總名とせんことは、なきにしもあらねど、篇中にいでたる一曲の名を總名にせんことわりやあるへき、その誤なることうつなし、まして延喜の御世の樂家本に、さゐはりとあるに於てをや、またこれを催馬樂曲とも、坊本に見ゆるは、となへと似て、そのふりも、催馬樂めきたれはいふなるへし、さて神樂は、舞樂宴なれとも、此大小の狹井張は舞樂にあらす、宴曲なり、直會にうたへるなるへし、これによりてその末に屬けたる也、

宮人

(本)宮人の大裝衣(おほよそころも)よひざとほし　ひさとほし　(末)着(き)のよろしもよ大裝衣

原本には、上の句を本とし、下の句を末としたるを、今合せて本末を分たす、たゞかへしの詞を句に加へおくのみ、次々も、みなこれにならふ、また信義本には、この歌に、

倭舞歌とあるよし、されは、倭舞にも、うたへるなるへし、古語拾遺によれは、むかし天照太神を、大和の笠縫邑にいつきまつり給ひし時、宮人皆まゐりつどひて、豊ノ明す、その時宮人だち「大夜すがらにいざ通し齋（ゆき）の宜しも大夜すがらに、とうたへるよし、それを、これはよみかへたる也、さてこれによりにみても、この歌の宮人は、大三輪の神宮に仕まつる神主だちをさせることとしるし、神主のよめるにはあらす、神主だちの高きすがたをみて、氏子のよめる也、大裝衣は、たけ高くかざりたる衣也、ひざとほしは、上より膝までのすらりとしたる体也、通し、遠し、同義なれは、いづれにしても、すらりとしたる長きさまを云也、きのよろしもよは、今云きなりのよろしき也、もは感詞にして、。よはかたへの人によびかけたる也、古歌のしらべによりて、詞をいさゝかかへたる也、後世初學の人なとも、この体にならひて、先づ古歌のしらべによりて、今の事をいはゞ、よこ道にも入らじとぞおもふ、

木綿垂（ゆふしで）

本 ゆふしでの神のさきだの稻（いな）の穗の いなのほの 末 諸穗にしあれはこれてふもなし

是は戀の歌なり、上の句は序にて、神のさき田は、神の幸はへ給ふ田なり、諸穗（もろほ）は、二つならひたる穗をいふ也、これはこひの誤なるへし、禮、比よく似たれは、誤れる也、原文のまゝならは、これかれといふこともなしの意なり、さ見れは通せさるにもあらす、されとも、こひといふに定むへし、歌の意は、ゆふしでゝまつる神の幸はへ給ふ田の稻穗のもろ穗のごとく、かく夫婦ならびすめは、戀こがるゝといふこともなしと也、

難波潟

本 難波がた汐みちくれは雨衣 あまころも 末 田蓑の嶋に田鶴たちわたる

雨衣は、田蓑の冠詞也、田蓑の嶋は、今大阪の北區に田蓑橋といふあり、そこらはむかしの嶋にてありしよし也、万葉に、「若の浦に汐みちくれは潟をなみ、芦邊をさして田鶴鳴わたるとあるによく似たるは、是似たるにあらす、よみかへたるなり、

前張

本 さいはりに衣はそめん雨ふれど あめふれど 末 移ろひがたし深く染てば

さいは、さきの音便也、はりははりの木なり、大和の奈良より三輪をへて、伊賀の名張

に出づる間に、榛原と云所あり、はりの木の多き原にてありけん、名張も名高き榛の木のありて、名をえたるなるへし、みな地つゞきなり、その木の皮をさきて、衣をすりてそめしなり、それをすり衣といふ、一本にすらんともあり、かのしのぶもじずりなどいふもこれ也、この前張と總名の狹井張とはあつからぬことなるを、同し事のやうにおもひて、さて總名の狹井張を前張とかきしなり、此歌の意は、下の句より中句にうつり、さて上の句にうつりて意をとるへきなり、榛にてふかくそめたれば、この通り、雨はふりかゝれとも、色は少もかはらぬ也、されば、いつれの衣も、みなさいばりにすりて、染めましものをと也、染てばは、染てあれば也、諸註みな叶はす、おもふに此歌も、三輪わたりの人のよめるなるへし

尻長鳥

本

しなが鳥猪名の湊に入船の楫よくまかせ船かたぶくな　ふれかたぶくな

尾長鳥を、しなか鳥ともいふ、しり長鳥の義にて、尾をしりといふを略せる也、尾長鳥は、

多く率ゐてゆくものなれは、ゐなのゐに冠らせたる也、猪川の湊は、今の津の國池田町の西ながるゝ川を猪名川といふ、その邊ぞむかしの湊なりし也、まかせは、まけの延也、楫をよくとるをまくといふ、梶取にも船にも令したる、そのさま見るがごとし

末

わか草のや妹ものりたりあいそ　われも乘りたりや船かたふくな　ふれかたふくな

わか草は、妹の冠詞也、是はもと一首の歌なるを、本末に分けたるまて也、楫よくまけといはすして、船かたふくなをうちかへして云る、妙々、すへて有情の物につきていふよりも、無情の物につきて云る、情さらに切也、さて古今集ノ春、「かすがのはけふはな燒きそ若艸の妻も籠れりわれもこもれりとよめる、この歌をとれるなり

井名野

本

し長鳥や猪名のふし原あいそ飛てくる鴫が羽音はおとおもしろき　しきがはおと

ふしはらは、五倍子はら也、鴫はむかしはすみてよべり、今濁れるはわるし、家の鴨居、

鳴ゐのしきゐは濁らす、是れむかしのまゝなり、拾遺集、神樂に「しなが鳥ゐなのふしはらとびわたるしきが羽音はおもしろきかなと直して入れたり、されとも古調をうしなへり、是等は古今のしらべをくらべ見るに、尤便なり、よく氣をつくし、さて此歌より以下は、本末一連、男女贈答の歌也

末

しなが鳥や猪名のふし原あいそ網さす吾夫(わがせ)の君はいくらかとりけん　いくらかとりけん

あみさすは、あみの兩方に竹さしてはる也、今も小鳥取るには、かくする也、是は女の受けて云る也

吾妹子(わぎもこ)

本

吾妹子にや一夜肌ふれあいそあやまりしより鳥もとられす　とりもとられす

是は、右の歌につゝけて男の女にいひかけたる也、あやまりは、今いふしくじるなり、因に云、しくしるは、爲挾(しくじる)の義にして、爲くねるといはんがごとし、くねるは、まがる

也、いたづらに夜をあかしゝによりて、鳥もし損(そん)じたると也、

末

しかりともや吾夫の君はあいそ五ッ取り六ッとり七ッとり八ッとり九よ十をばとりけん　となばとりけん

是は女の男にこたへて云る也、しかりともと、うけて云起したる、いとめづらし、九ッをこゝのよといへる、今も女子の羽子つく詞にかく云り、以上ゐなかの男女がかたみに云ひかはしたる歌にて、何のおもしろきふしもなきたゝ歌なれとも、歌と云へは、平詞にもきゝなされず、是れ天地をもうごかすのはじめなり

小狹居張

薦枕

本

こも枕いや高瀬の淀にやあいそ　誰が贄人ぞ鳴つき上(のぼ)る網下(おろ)しさでさし上る

こも枕は、高の枕詞也、誰がは何といふの意に用ふ、贄人は、魚鳥をとりて上の供御に奉る人をいふ、にへは新饗(にひあへ)のつまりなり、鳴つき登るは、入綾に、下總國人の云、我か

あたりにては、鳴とるに、竿の末に小網つけて、鳴のゐる所を見つくれは、その竿を廻らしながら近よるに、鳴動かすなりぬ、そこをつきて捕る也と、是昔よりの習はしなるへしと云り、うけかたき説なれとも、姑く引く、鳴をとり上る意也、さでは、今俗に、しやでといふは、さでをなまれる也、竹を細くけづりあみて、小魚をとる具也、

のことくしたる物也、さでは、小手の義也、

末

天にますや豊をか姫の　やあいそ　その贄人ぞ鳴つきのほる網下しさで指上る

是は、右の歌にこたへたる也、上の句は叙言にして、下の句は叙事也、本歌と同し格也、

賤屋(しつや)の小菅(こすげ)

本

賤屋の小菅鎌もて刈らばおひんや小すげ

末

賤屋は地名也、菅の多き所と見ゆ、是やかて拔本の事にもたとへつへし

あめなる雲雀、よりこやひばり、富草　とみくさ　もちて

あめは、あぬの誤なるへし、万葉書に、女の字をかけるは、奴の字の欠たるなり、万葉に、草陰の阿奴とありて、伊勢の安濃郡をいへる也、こゝもその地の人のよめるなるへし、安野といふ地名は、この外の國にも多く見ゆ、富草は、今の肥草也、阿奴にすめるひばり、富草多くもちて、我がかたへより來よといふ意にて、男より女に遣はしゝうたと覺ゆ、されは富草は、今の持參金なとの類を云ゝなるへし、富草安野相映す、天(あめ)と見ては、ひはりに緣あれとも、ひはりのすめる所にもあらねに、草にもうけ合はす、その寫誤なることをしるへし、

磯良崎

本　いそらか崎に鯛つる海人の　たひつるあまの

末　我夫子が爲めとたひつる海人の　たひつるあまの

先づ地を点じ、次に目的を点し、その上下にあまのといふ同し詞を点じたる、奇創といふへし、殊に海人のといひて、雙方ともに省筆を用て、その名をかくしたる、煙波千里の趣あり、磯良崎は、常陸にもこの地名見ゆれと、こゝは志摩國答志郡にあるをいふな

るへし、さて是は志摩人の歌なれは、前なるは、伊勢人のよめる歌なること明けし、

細波（さゝなみ）

本

さゞなみや志賀の辛崎や御稲舂（みしねつ）く女のよさゝやそれもがな彼もがないとこせん、まいとこせにせんや

御稲つくは、新嘗祭なとに献る米をつくをよめるなるへし、よさゝは、よさよさなり、すへて重ね詞は、次の頭字をはぶく定め也、あしあしをあしゝといひ、いたいたをいたた、あらあらをあらゝなといふ類也、いとこは、したしむ詞也、従弟をいとこといふも、俗にいとこどしやらよう似とると云るごとく、兄弟の子は、みなよく似たれは、その子を兄弟のやうにしたしむゆゑなり、せは夫（をとこ）をいへとも、妻をもせといへるなるへし、そは女を妻といふは常なれとも、夫をもつまといへるに同じ、こゝは、いつれもよき女なれば、かれもこれも、わか妻にしてしがなと乞ひ願へるよし也、次にまもじを加へたるは感詞也、今もこの詞遣あり、それをいとこの美稱とせんも、感詞を加へてその意とは

なる也、此の歌、上の句は叙事、下の句は希望

末

芦原田の稲舂蟹のやおのれさへよめをえずとてやさゝげてはおろしやおろしてはさゝげやかひなげにするや

是の歌は、本歌のよき女をえてしがなとこひ願ひてもえがたきより、稲つく蟹におもひをよせてなぐさめしなり、みしねつくより、しねつく蟹におもひいたる、妙也、おのれは、蟹の身につきて自分さへとなり、よめはもと産女をいふ詞なり、新婦もわかけれは、やがてよめとはいふ也、さゝげては云々は、蟹のはさみをあげさげするをいふにて、それを、蟹もよめえずとてもたへ苦しむといふ意に云るなり、かひなげは、かひなきやうにするさ也、原文に、にををに誤れるは、万葉書の耳を草体より寫誤りて、乎にしたるなり、こゝに氣づかざるより、かひなげを臂擧（かひなあけ）としたる、いとをかし、上にさゝげてはおろし云々と云るに、またいかでかかひなをあぐといはんや、初學の歌にこそ、かゝる拙き歌もあれ、神樂の章にえらへる歌に、この陋あらんや、その他のさゝけては云々な

その註も、みな事情に叶はぬ説にて、云ふにたらねば、こゝにはいはず

植槻(うゑつき)

本 植槻や田中の杜やもりやてふ笠の淺茅が原に 末 我おきて二妻とるやとるやてふ笠の淺茅がはらに

是は、上下の句を分けて本末にしたる也、故に今合せてあぐ、植槻、田中の杜、淺茅原、みな大和國添下郡の地名と見えたり、その中、田中杜、淺茅原は小名なり、植槻や田中の杜やといへど、その實は植槻の田中の杜也、その杜といふが、やがて植槻の杜なるなり、されば、これは下の笠の淺茅原と一連によめれども、上の植槻ノ田中の杜は、第二の妻とりし所にして、笠の淺茅原は、本妻おきし所なり、本妻おける所なるが故に、下の句に笠ノ淺茅原にと、再云へるなり、この句法によりて、これかれの分ち、それとしらるゝやうによめる、妙甚し、結句許多の怨恨、われおきて、本妻のいへるなり、我おきては淺茅原に接して下し、二妻の句は、上の句をうけて下す、自家の地と二妻の地とを以て、はさみて章をなせる、更に妙々、

總角

本 總角を早稲田(わせた)にやりてやそをもふとそをもふと〱〱〱〱 末 何にもせすしてや詠めすらなかめすら〱〱

總角は髮のたれたるを女のゆひあぐる、十五六歳の頃をいふなり、先つ生おつる頃よりいはゞ、赤子(あかご)、乳子(ちご)、緑子(みどりこ)、うなゐ子、うなゐばなり、めざし、あげまきなり、わさ田は、わせだなり、歌意は、いとをしき揚卷を、早稲田へ稲刈に遣はし、それをおもふと、何にも手につかずして、ながめくらすはとなり、らは助字也、この助字にあぢはひ有也、愛憐の情を、ありのまゝにうちずしたる、何等の天眞、さて此歌の下のながめを、原文に春日とかきたるを、そのまゝはる日とよめるは、呆看なり、この神樂は、みな万葉書にしたるに、是斗春日とかける、その故なからんや、けたし、春日は、日長く、雨もとかくふりがちなれは、春日とかきて、ながめといふ意に用たるなり、それにてこそすらといふ詞も解かるへく、早稲田にも應すべけれ、しかるを、春日をながめと心得ずして、この歌を春の日の歌とし、それより早稲田を春の田とせるものあり、是例なきこと也、わさ田なといふは、みな秋の頃に至てよめるなり、わさ田とて、春とくうゝることあら

んや、また春日とすとも、春日をくらすを、たゞ春日すといふへきかは、是その誤れることをしるへき也、

大宮

[末]大宮の小さ子舍人やてゝにやはてゝにやは玉ならばてゝにや[末]玉ならば晝は手に取り夜はさねてん

大宮は、皇居也、小さ子舍人は、殿中の舍人が小さ子也、さねてんは、さは美稱也、抱てねてんと願ふ也、げにも小さき若子のうるはしき衣きて、たちまふすがた、見れば、この情おのづからおこりぬべし、手にとりは、玉をうけ、さねてんは、大宮をうく、照應極て細かなり、

湊田

[末]湊田に鵠(くゞひ)八ッ居(を)りや八ッなから物もはずをり鳥鶆無(ころちな)やころちなや[末]八ツなからころちなや八ツなから物もはすころちなや〳〵八ツなからころちなや

物もはすは、上のそをもふといふと同しく、みなおもじのはぶかるゝ也、ころちは、とりもちの約也、鵠八ッながら、みな物もおもはす、何心なくをりけるに、鳥もちなきが殘

念なるやとなり、人事上、これにあたること、極て多し、氣をつくへし、上の句より、一層は一層より緊しくなりて、終に鳥もちのなきにおとし入れたる、切齒のさま見ゆ

蛩

きりきりすのねたさうれたさや御園生にまゐりくきの根をほりはんでおさまさ角折れぬなさまさつのをれぬ

是は、蛩の草の根をあらしけるを惡みての歌にて、そのうらに、何かの寓意ありしなるへし、今の世にも、廊堂にこの類多かるへし、御園生は、禁苑也、くきのくは、原文に、天の字書けり、是正しく久の字を誤りしなるへし、今改む、くきは、草の莖なり、是も先輩は、こゝに心づかずして、きのねを、樹の根としたる、をかし、蛩に木の根をひきていふ、倫をなさぬことなり、ほりは、まほりにて、貪(むさほ)る也、貪るをまほるともいふは、ほりは、欲(ほり)するのほりにて、それにまの美稱を加へたる也、角は、きりきりすの長き毛をいふ也、草莖の根本を貪ほりはんで、終にその角のをれぬるそ、心おそき、と笑ひしよし也、おさまさと、拍子の詞ながら、その中に笑ひを含めし也、義はおぞましさか、

或説

本志太良がまうどの、一重の狩衣、な取れそ、ねたしなとりれそ　小雨にそぼぬらせ、夜離れする、いといとねたし、

したらは、三河の地名と云り、かまうどを、高麗人と云は、いかゞ、受かたし、かをうへにつけて、眞人と云るもあれど、是も信けかたし、おもふに、かまのまは、りをあやまりたるにて、狩人にてもなしや、さなくは、この句下の句にも應せす、とにかく、是は女の戀のの歌にて、ぬきすておきし狩衣をとり入るゝな、小雨にぬらせ、毎夜來へきに、目かれするが、いといとねたければと也、とりれは、とりいれの約也、そぼは、雨そぼふるなといひて、しつぼりぬるゝをいふ也、夜かれは、夜離るゝ也、足のたゆる也、男女の間には、このやうの事は、隨分あることにて、女のうへにつきて云る、尤情あり、色あり

千歳法

本

千歳々々千歳や千とせの千歳や

末

万歳々々万歳やよろつ世の万歳や

音訓ましへて異なるやうにきこゆる、面白し、是にて知る、音異なれは、義も異に、詞いさゝかたかへは、意もまた少しくかはれることを

早歌

本いづれそもとゞまり　末かの崎こえて

この早歌は、二句分けて本末也、いたりて短き歌故、早歌也、是は贈答の体にて、旅人に宿屋の人の言かくるに、旅人の答ふる也、いつれそもは、今の何とぞ也、何とぞみなさまおとまりあれと云へば、あの山のさきこえて、あちの宿でと也、いとおもしろし、さま是をみて、むかし東海道五十三次のありさまおもひいだしつ、さてこの上の句を、さまりはいづれぞ、ととひし意に、註せるは、わるし、是は詳しくいはゞ、いづれもそれもの意にて、いづかたさまもといふ也、そはすみてよめる也、節付の本には、二句のうへ

に、おのおのやもじあり

み山の小葛　くれくれこつゞら

是も、本歌はよびかけ、末歌は受けて、くれくれと合する也、

鷲の首とろんと　いとはたながうて

是も鷲の首とらんとおもふといふを、それを受けて、いかさま至てそれもながうてのと云也、とらんを、とろんといふも、今も豐後國に、この詞あり

あかゞり踏むな後なる子　我も眼はあり先なる子

あかゞりは、あかぎり也、普通也、あしのきめのわろき者に、よく出來るもの也、我も眼はありは、さきなるものに對して、我も何はなくとも、眼はあるよ、あまりなることをいふなとなり、是も末は、本を受けて云るなり、前後の子にて、それとしらるゝが妙なり、且句法の簡峻を味ふへし、

舍人來ぞしり來ぞ　我もこそ後こそ

是は、三人づれの中なる一人の云るなり、舍人もくるぞ、しりから來るぞ、我もくるぞ、

しりから來るぞ、先づ々々ゆけとなり、是も句法さらに簡峻にして、三人のすがた見せたる、甚妙なり

彼方の山せ山　せ山や背山

せ山は、山のせの山にて、うしろの山也、せ山や背山も、上のせ山をうけて、背山のまたそのせ山也、あの山こえて、またその山のうしろにすむと、男女の戀てよめる詞とみゆ、舌切雀の道行に似たり、國名の山城も、山せの延たる詞也、シロをつむれはそにて、そさせと通音なれは、背をそともせともいふ也、又後をしりといふも、しろと通音にて、同義也、此歌、只遠望の景を敘して、一句も情をいはす、而して無量の情、その中にあり、味ふべし

近衛の御門に巾子おつ　髮の根の無ければは、

近衛の御門は、陽明門をいふ、一人參朝の時、陽明門の前にて、冠の巾子の落ちたるといへは老の頭に、髮の根の無ければなりと受けたる也、むかしは、冠の磯額と髮をいるゝ巾子とは別にして付たるとなり、

本 ゆすりあげよそゝりあげ　末 そゝりあげよゆすりあげ

是は二人の狂言也、物を背に負うたるにいふ也、ゆすりは、ゆすりにて、身につけて動かしつゝあぐる也、すゝりは、すりゝにて、身にすりつけてあぐる也、

本 谷からいかば尾からいかん　末 尾からいかば谷からいかん、

尾は山の尾也、人は、谷からいかば、我は山の尾からいかん也、世をわたるにも、事をするにも、外の國にましはるにも、軍するにも、みなこの見識にてすへし、金言不磨、吾これを日に三度よむ、句法も頂針廻環法を用て、左右道かへて、その志を果さんの狀見えたり、且主客をいはすして、主客判然たる、御國の詞の妙なる所也、

本 此からいかはかれからいかん　末 かれからいかば此からいかん

意上に同し、上なるは谷嶺を以て云ひ、此なるは此彼を以ていふ、乃ち色なし、文の巧拙、一二字にても分るゝなり、

本 女のざゐは　末 霜月師走の垣毀ち

女子の淺智をいへる也、霜月師走の霜雪のふる頃、薪のたゐたるに、垣のかれ枝とりこ

ぼちて、薪にする也、垣のすくをもはからす、薪を遠きに求めすして、近きに求む、遠き慮なければは、近き憂ありのをしへにも背く、女の淺智、げにもかくのことし、右の譬迂なるやうなれとも、もと深山の里につきて云る譬なるべく、市人の女に付ての譬にはあらさるへし

本 あふり戸やひはり戸　末 ひはり戸やあふり戸

あふりは、はふりと同し心の詞なれは、常にとりはづしのなる戸をいふ也、ひはり戸は、日覆ひの戸なり、日に張るの義也、是は徒歌にて、例の狂言也、

明星

きりゝゝ千歳榮白衆等聽說晨朝清淨偈明星はくはや此なりや何しかも今宵の月のたゞこゝに坐すや　末は白衆以下同詞略之

きりゝゝは、拍子の詞なるへし、千歳榮は壽言也、白衆云々は、衆等に申す、晨朝の清淨偈を說くをきゝ給へと也、是法華懺法の六時の讃をとれる也、明星は明がたの明星也、くはやは、驚く詞也、月の下に如くの詞を加へてみるへし、歌の意は、みなゝゝあした

の清淨偈說くをきゝ給へ、あれ明けの明星も、あはれこゝにますぞ、何しにこよひの月のごとく、たゞひとりこゝにますや、あらありがたや清淨偈は、そらにかがやく明星もきゝ給ふぞや、これをきゝて念ずれば、千歲万歲も榮ゆへし、とうへに返るなり、この神遊の歌に、かゝる法華懺法の讃をさへまじへてうたへる、いかに大和心の迷ひけん、いま〱しくも、けがらはし、是にてそのかみの佛法に靡けるさま思知らるゝぞかし

得選子

本

得選子(ここせりこ)が閨なる標結(しめゆ)ふ檜葉(ひば)を誰かは手折(たをり)しここせりこや祟(たゝ)らこき檜よ やたれかさたなりしとこせりこ

とこせり子は、選はれて宮中に仕ふる女官の名也、その女をえんとて、檜葉の下にてかたりあはんの標(しめし)をゆひつけておく、その檜を何人か手折りし、この忌ま〱しき檜の木よと也、人につきていはす、木につきていふは、その人をにくむより木までにくむ也、俗に云、坊主惡(にく)ければけさまて惡くしといふ是也、たゝらこきは、しげこき、かしこき、ひつこき、なといふ類にて、こきは、形容詞也、祟(たゝり)の多きをいふ詞なるを、にく〱しき、あるはいま〱しきなといふ意に用たる也、タ、ラ、タ、リ、音通也

末

我こそは見ればやうれたさに手折て來しか やとこせりこや たゝらこき檜よ やたをりこしか やとこせりこ

是は本歌に手折りし人の答へたる也、我こそその木を見たれは、あまりねたくうれたさに手折りて來しかども、さして深き意のあるにはあらす、この檜の木のあれはこそ、標もゆひ、我も手折らんの意もいでたれ、いま〱しき檜の木よとこたへたる人も、その人につきていはす、檜の木につきて云る、歌の雅俗も、情の淺深も、みなこれによりて分るゝ也、今の新らしき歌よみ、この合点ありやいなや

木綿作

本 木綿つくる信野(しなの)はらのや あさぎつね あさきつれ〱 末 あさきつれ ましも神ぞあそべ〱〱
〱〱〱〱

信野は國名也、あさきつねは原文に、あさたつねとあり、これは万葉書の幾。を多。に誤れるなるへし、さらでは心えがたし、この歌は、朝神樂のありし時、社にすめる狐をみて、

汝も社にすめるうへは神なり、けふはいでゝ神遊せよといへるなるへし、さて是等の歌よりして、後世終に狐を神としまつることゝもなれるにはあらぬか、かの稻荷の神の使なりといへるは、保食ノ神の御名、一名みけつとあるを、むかしは狐をきつとのみもいへは、終に此神の使なといふ俗說のいでたるにて、いふにもたらぬこと也、此歌、木綿、朝、神、遊の文字を、上中下に点綴して、信濃の諏訪社なとの神事をしらせたるにて、狐に、汝もとあれは、氏子どものあしたにつどひて神遊せる、いはずともしられぬべし古歌は、詞少なければは、何の味もなきたゞ歌のやうにて、よく玩嚼すれは、いひもいはず味のあるぞかし、汝をまし、いまし、なといふは古言なり、

日靈歌

本

いかよき態してか、天照るや、日靈の神をしばしとどめん　しばしとゞめん

是は天照大御神の神事によめる也、わざは、わざをぎにて、神あそひをいふ也、天照は、ひるめの神の冠詞にて、大御神の御名を、大日靈ノ持と申す、祭はてゝ、神の歸り上りますを、いましばし何わざしてか、とゞめ申さんやとなり、敬神奉公の道、いつれもかくこそあるへけれ、

末

何處にか駒を繫がん、朝日子がさすや岡べの玉笹の上に　たまさゝのうへに

拾遺集、神樂歌に、吾駒ははやくいかなん朝日こが八重さす岡の玉さゝの上に、なとあるを少し直しゝなるへし、この歌をひるめの歌にあはせたるは、朝日の詞をとれる也、玉さゝの露けきほとりに繫ぎて、さゝくはせんといへる、一讀淸冷の氣、身にせまるやう覺ゆ、

湯立歌

湯立は、湯氣をたつるにて、神事にするわざ也、その時の歌に、左の歌をうたへる也、

本 伊勢嶋に海人をとめらが燒く火の氣 おけ〳〵　末 たくほのけ 磯の崎々かをり合にけり おけ〳〵

伊勢嶋は、今の志摩國也、伊勢國を分て、嶋を志摩と書ける也、燒く火の氣は塩たく火の氣也、是湯立にちなみて、そこの風俗歌をとれるなるへし

本大君の弓木とる山の若櫻おけ〳〵末わかさくらとりに我ゆく舟楫棹人かせ　おけ〳〵

弓木は、弓にする木也、その木のおふる山のさくら也、川こえてゆく山と見ゆ、舟かぢさほ人かせ、と人に賴む也、上の句、春容、下の句、波蹙、相配して極妙也、

神上

本

皇神のけさの神上にあふ人は、千とせの命ありとこそきけ

終夜神わざして、あさになりて、神をそらにおくりあげ奉るを、神上といふ、この神事にあふ者は、千歲も生くるとなり、

末

皇神はよき日祭れは、明日よりは明の衣を褻衣にせん

よき日をえらびて、皇神をまつりをへぬれは、あすよりは神事の服をぬぎ、不斷の衣にきかへんと也、あけの衣は、明衣とて、延喜式に見ゆ、淨衣とも云なり、是やがて禮服なり、故に褻衣に對す

朝倉

本朝倉や木の丸殿にわがをれば末わかをれは名告をしつゝゆくは誰が子ぞ

朝倉は、和名鈔に、筑前國下座ハシモツアサクラ、上座ハカミツアサクラとある、此地也、齊明天皇の御時、百濟の高麗をせむる、救を我國に求めけれは、天皇いでまして、此朝倉ノ橘ノ廣庭宮にうつります、その時天智天皇も太子にて供奉し給へり、此歌は、即天皇のよみ給ひしなるへし、むかしは、やむごとなき御方の御前をすぐる時、御目見え奉らさる時にても、名を告げてゆくことなれは、それをみそなはして、あれは誰が子ぞ、是れは誰が子とかたへにはべる人に、一々御尋ねありしと也、すへてその子の名をきゝ給へは、その親なる人の名までも、尋ね玉ふは、みなその家すぢを重んじ給ひて、功たてんをりには、必その親までの事をもおもひあはせてあげ給はん時の爲めなるへし、木のまる殿は、木のまる木にてつくりし殿也、今もけづらざるそのまゝの木を、まるたといふ、是なり、まるたは、丸太のつまりて、音のうつれるなり、行宮なれは、かゝるあらつくりなりしと見ゆ、吾此御歌をよみて、むかし君民の間のきはめて近くしたしかりし

をしる、今ならば、巡査なご奉仕して、近つけ玉はんと思召すとも、これをへだつるものゝゐて、中垣となれは、君民の間おのづから遠ざかりゆきて、その情もおのづから薄くなり、君を尊ふの名ありて、その實さらになきことゝなりぬるも、せんなき次第なり、

或本

本

朝倉やをめの湊に網引をれば、玉のめさしにあひき合にけり

此歌は、戀の歌也、朝倉の詞あるゆゑ、こゝに取れるのみ、をめの湊は、地名也、筑前に姪の濱といふあり、そこの古名にもあらぬか、をめといふは、小女の義にて、そのを。をはぶきて、。めの濱といへるに、姪の字をあてたるか、將又、姪は兄弟のうめる小女なれは、むかしは、姪ををめといへるにてもあるか、とにかく、朝倉やをめの濱と云へは、今の姪の濱をいへることうつなし、玉は美稱にて、めさしは、小女をいふ也、枕草紙にも、尼にそきたるちごの日に、髮の覆ひたるとありて、髮のみぢかきがたれて、目をさす頃の童女をいふ也、あひき逢にけりは、網のよるごとく、その女に逢にけると也、上

のあびきは、實、下のあびきは、虚なり、

末

葛城や渡る久米路の繼橋の心もしらすいざ歸りなん

是も、戀の歌にて、男の女にかよひたれとも、そのこゝろしれず、せんなしとて、歸らんとする時の歌也、上の句は、男女の緣をつがんとて、男のかよへる女をやがて繼橋にたとへたる也、葛城の久米路のはしは、役小角のつくらんとはかりて、ならでやみしといふ故事をとれるなり、されは、此男は、一度中絶えてさらにまたあひたれとも、遂にその心しれすして、歸れるなるへし、わたる、つぎはし、しらず、歸る、多少の曲折あり、味ふへし

其駒

その駒ぞや我に われに 草こふ草はとりかはん、水はとり 草はとり かはんや

人の駒をめでゝよめる也、あはれ、我に草こふ、草をはとりきて飼はんか、水をはとり來て飼はんか、となり、そのとさし、我といふ、これにて彼我わかる妙々、

蘆駿歌

本 葦淵の杜の もりの したなるわか駒ゐてこ、葦毛駮の虎毛の駒 末 その駒の歌と云々

あしふちは、牧場にてありし所の名なるへく、駒といへは、わかといふまじきことなれと、駒は馬の通稱となれは、わかをそへたる也、歌の意は、いでやあし淵の牧場なる杜の下にはなちがひにしけるわかき駒をつれてこん、葦毛の駒ぶちの駒虎毛の駒をとなり、一ッの駒をもて上三色の駒を括す、地名のあしぶち、毛色のあしぶち、上下相映して趣をなす、

竈(かま)殿(との)遊ヮ歌

本

豊竈神遊(とよへつひ)ひすらしも、久方の天のかはらに琴の聲する ここのこゑする

豊は美稱にて、竈神は大炊式に、竈神八座とあり、この久度(くど)の神を祭給ふ夜の神遊の聲をきゝてよめる也、神遊は、原文にみあそひとあるは、かもじをおとしゝなり、今加へつ、宮中なれは、久方の天の河原にと形容せる也、諸註みな非なり、

末

久方の河原に、豊へつひ、神遊すらしも、琴の聲する

上の歌と、句をおきかへてしらべたる也、是らも歌よむ時の心えともなりぬべし

酒殿歌

酒殿は廣しま廣し、甕腰に、わかてなとりそしか告なくに、

酒殿は、縫殿、織殿なとの類にて、神に供ずる御酒かもす室をいふなり、ま廣しは、重ねていふなれとも、廣きうへにも廣しといふ意を、まもじにてしらせたる也、甕こしは、酒つくる瓶のもとをいふ也、わかては、綰手(わが)也、わがは、髮のたれたるをあげて綰ぬる也、後世はわげとも、まげとも云へり、音の轉也、手はねと音通にて、山の根を山手といふ類にて、わがねをわがてと云へるなり、髮をわがねたるうへにつきていへは、わがてをとるなといふ也、酒殿は、今の酒造家の藏みても、いたりて物忌するものなり、殊に神酒かもす所なれは、潔齋をすること、いふもさらなり、しかるに、女はとかく髮のたれやすきものにして、常に手をあげて髮をいろふなり、甕のこしにて、髮いろふは第一

の禁物なるよしなり、そは髪のおちて瓶に入り、あるはしたにおちて、きたなき物なれは也、しか告なくにとは、つげなくともと也、此歌を、戀の歌として、甕こしに云々を、瓶をこえて女の手をとりてたはむるを、女の制したるなりととけるは、興のさめたる註ども也、いかなる男女にても、神酒をかもす酒殿にありて、たはむるものかは、ましてその歌を神樂の歌にとらんをこのものゝあらんや、

末

酒殿は今朝はなはきそ、舍人女の裳引裾引けさは掃てき

今朝は、今日の寫誤なるべし、下にも今朝とあれは、詮なきことなり、万葉書の介婦を介佐に誤れる也、舍人女は、宿直の女也、是も酒殿をあさとくはき清めたるを、晝にいたりてはきたらんには、中々にちりのたちぬるを制したるにて、上の歌と同意なり、是をみても、上の歌は、諸註のごとき歌ならさるをしるにたらん、

或說

天の原ふりさけ見れば八重雲の雲の中なる雲の中との中臣の天の小菅を辟秡ひ祈りしことは

けふの日のためあなたふとやわがすべ神のかみろぎのよごと

是は、宮中の神事を見奉りての歌なるへし、九重の神事なれは、すへて天上の事に見たてたるなり、むかし中臣氏の天の小菅をとりさきて、それにて身をきよめてはらひいのりしも、けふの神事の爲め也、その秡は皇神かみろぎの吉事よ、となり、皇神かみろぎ重ねて云ふは、みくにの常也、よごとは、神事をさすなり、原文によさゝと書けるは、よごとゝあるを寫しあやまりし也、かみろぎのよさといふへきことかは、なめげなる事なり

末

庭鳥はかけろと鳴きぬ也おきよゝゝ我一夜妻人もこそみれ

是は戀の歌にて、万葉に、「吾門に千鳥しばなくおきよゝゝわが一夜妻人にしらゆふなとあるを、庭鳥にかへてとれるのみなり、庭鳥は、神代の事によしあれは、かくかへてこの神樂の歌に加へたる也、かけろは、なく聲也、なりの詞を加へしはうたふにしらべよしと見ゆ、人もこそみれは、人のこぬうちに、早く起きよと也

催馬樂評註

催馬樂評註緒言

催馬樂は、神中抄に、一條左大臣雅信公の作とみえて、延喜の御世、朝野の俗歌を集めて、譜を作らしめられ、堂上がたの宴曲にそなへられたる者也、それを催馬樂と名つけられしは、長瀬眞幸の說を正とすへし、その說に云、催馬樂は、その初に出たる吾駒の歌を取て名付たる也、その歌は、もと万葉十二にいで、吾か駒はやくゆきこそ待乳山、まつらん妹をゆきてとく見む、とある歌也、はしめの二句、馬を催す詞なるからに、催馬樂とは名つけたる也、樂は、唐の樂曲どもの名、某樂といふによりたるにて、やがてその字音をとりてらとよぶ也、と云りしよし、玉勝間に見ゆ、この說のごとく、別に六かしき心もなき也、伊呂波の頭もじをとりて、一首の總名にしたる類也、

此樂すでに宴曲なれは、神樂譜とは、その趣大に異なり、且朝野の俗歌をとりたる物なれは、よきもあり、あしきもあり、槩していはゞ、その歌眞摯率直にして、よくせすは、直情徑行の弊なきにあらす、されとも、これわがみくにの風俗にして、おもひ邪なき所なり、

支那なとにては、萬事直情徑行を戒むるゆゑに、そのをしへはあしきことにはあらざれども、その弊、僞に流れて、眞をいふものなし、故に支那は、詩經の外、人情をしるよしなし、只唐詩のみは、眞に近し、故に後世までも稱美する也、詩經は、この弊のなき時の作なり、故に人情も世態もよくみゆる也、是れ采風の一端ともしたる所以也、わが邦のいにしへはしからす、直情徑行を戒むることなし、故に何事もおもふ所を邪なくいひ出つるゆゑ、歌としもいへは、みな眞なり、眞の心をもて眞の事をうたひ出つる、是をもて後世の情をもていはゞ、いひかぬることまでもいひ出てゝ、あしともおもはす、人もまたあやしまさりしなり、男女の相聞にいたりても、この風なれは、親子の間に歌ひかぬるやうの事までも、うたひ出てわらひ興せり、さりとて、その心、人を挑むにもあらされは、いふ人も、きく人も、罪なき也、後世にいたりて、儒教の弊をうけて人みなおもふ所の外をいふならはしとはなりぬ、是後世の歌のその情をみることあたはさることゝなれる源頭なり、且又男女の事に至ては、尤もかたく戒むるより、色といへは、やがて淫慾の事とのみおもひて、色赤からむるやうになりぬるゆゑ、つとめていはすなりぬ、いはすなりぬるゆゑ、

ふといひいてぬれは、いよ〳〵その人迄も、疑を蒙るやうになりぬ、是皆からやうの弊にして、この弊をうけたる世よりみれは、催馬樂をうたひし頃は、いかなる淫風の盛なる世なりけむ、とおもはるゝ斗なり、されとも、その頃は、すてに右に述へしごとくなれは、さまて猥りがはしきこともなかりし也、眞の赤き心をうちずゝれは、花は紅に、柳は緑なり、緑を紅とも見ねば、紅を緑とも見ぬは、今も昔もかはらぬ也、その心もて、この間の歌はみるへきなり、されとも今日の人情としては、すてに風教のくづれぬるまゝに、人情もかはれは、風俗もかはり、今も昔のごとくあれといはゞ、薪をもて火を救ふがごとし、寸をためて、尺を曲けしは、昔の弊にして、この尺を直さは、その弊は一丈にもなりぬへし、たゝ歌といふものは、眞をいふものにして僞をいふものにあらすと心得て、さて人情をもまげず、風教にも害なきほとに歌よまば、初て古の尊きをしへにも叶ひぬへく、はたまた采風の一端ともなりなんかし、こゝに於て、この樂譜をも評して註するなり、よむ人よく〳〵玩味して、古道の存する所を學ひて、その弊を受くることなかれ

律

吾駒 二段

一いで吾駒はやく行きこせ待乳山、あはれまつち山、はれまつち山 二待つらん人を、ゆきて あはれゆきて はやみん、

一いでは、物を乞ふ時の呼聲也、いざともいふ也、こせも乞ふ也、こそともいふ、みな音轉也、待乳山は、眞土山の借字なるへし、大和國より紀伊國に入る堺に有る山といへり、東國にもあり、まつらん人は、万葉に妹とあるをかへたるにて、我妻をいふ也、この歌敎とすへし、人の夫たるもの、この心なくては、叶ふへからす、かりそめにいづるにも、この心にて、はやく歸ることなり、妻のまつことをも顧みす、夜ふかして歸る者あり、いかなる心ぞや、吾さるもの、家に旅居して、此歌に感ずること尤も深し、待乳山よりまつらん人をひきいたす、この歌の趣向なり、

澤田川 三段

一澤田川袖つく斗淺けれど、二はれあさけれど 恭仁(くに)の宮人高はし渡す、三あはれそこよしや高橋わたす

澤田川は、いづこの川にや、續日本紀に、天平十四年八月乙酉、宮城より南の大路西の頭りと、甕ノ原ノ宮の東との間に、大橋を造らしめ、諸國ノ司に令(おほ)せて、その國の大小に隨て、錢十貫以下一貫以上、鑄さしめて、造橋の用度にあてらる、また十五年十二月已丑、平城の器械を運て、恭仁ノ宮に收めおき云々、辛卯に平城ノ大極殿、幷に步廊を壞て、恭仁ノ宮にうつして造り給ふと見ゆ、これによれは、澤田川は泉川をいへるにや、と梁塵後抄に云り、恭仁ノ宮人とあれは、此歌は、聖武天皇の時の人のよめるにて、澤田川も、その所の川なることいちしるし、此歌を諸註に諷意ありと說ける見ゆれども、もし諷意あるならは、あさきにとあるへき也、淺けれどゝあるを、いかでかさは解くべき、詞を論ぜずして、かれこれ推測するは穿なり、只淺くあれど、こたび高橋わたせりとほめたるまて也、ほめたるうちに諷意ありといはゞ、いふ人にまかすへき也、是をいふ者罪なし、きく人戒むるにたるとはいふなり、

高砂　七段

一高砂の さいさごの高砂の二をのへにたてるしら玉たま 椿玉柳三それもかとさん ましもか とましもかと 四ねりを練緒さみ緒の御衣架(みぞかけ)にせん五玉柳何にしかもさン、なにしかも、何しかも六心もまたいけん、百合花の、さゆり花の七今朝咲いたる初花にあはまし物を さゆりの花

此歌は、二人の息女ありて、それをわかき男の二三人いできて、懸想しけるを、かたへの人の制したる歌なり、高砂は、海邊に砂の山なせるをいふ也、播州の名所も海邊なれは、これによりて名をえたるなるへし、臺灣を高砂とこなたの人の名つけたるも、このよしなるへし、さてこの歌の高砂を播州と見れは、いづれその所の歌をとれるにやあらん、さごのさは美稱也、玉椿玉柳は、二人の息女にたとへし也、玉椿はその顏にたとへ、玉柳はその貌(かたち)にたとへし也、それもかは、それがしのそれにて、あれもかなり、ましもかは、汝もか也、みな問ふ詞也、練緒は、練たる衣也、さみをは、貲布をさよみぬのとよめり、貲は、帶の誤と云り、このさよみは、狹(さ)よみの義にて、糸一縷を一よみと今も云り、さよみを、さいみとも音便にいふ、それのつまりたる也、をはみな輕くそへたる詞とみてよし、絹布の衣を、二ツあげたる也、みそかけは、衣桁也、またいは惑(まど)ひの音

便音轉也、百合花は、親より許されし妻をさす也、一首の意は、高砂の尾上にたてる玉椿玉柳のごとき二人の女を、あの人もか、そなたもか、絹布の衣かくる衣桁のやうに、かしづかせんとな、何しにさやうに心惑ひけん、うつくしき百合の今咲たる初花のやうなる、殊に親よりゆるされし妻に逢ふへきものを、それをおきて、あだしの女に心まこひぬるとは、いかなる心ぞやとなり、若き者のうはきなるには、こよなき誡なり、初に女の住所を点し、以下玉椿に玉柳、それもにましも、練をにさみを、兩々相對して、叙し下し、結末に至て、百合花一ッなれは、さらに初花を加へて、詞の斤兩をはかれる、妙也、且玉椿玉柳と百合花とを以て、練を、さみをのみそかけにせんを夾み、彼此二三人の蕩子を言外に寫出し、何しかもと怪みたる、極て細心の筆墨味ふへし、人綾などに、二人の女に懸想して、後悔したる意に說けども、只懸想したるまでにて、手にもいれぬに、何の悔ゆることかあらん、それもか、ましもか、またいけん、などの詞を解しえざるよりあらぬ說どものいづる也、是は一人の汝とさすものに向て、さらに他の一人をさして、それがしもかといへるにて、同し遊蕩子の懸想せるを誡めし也、味ふべし

夏引　二段

一 夏引の白糸七はかりあり狹衣に織てもきせん汝妻離れよ

二 頑くなに物いふ女かな、汝、麻衣も、吾妻のごとく、袂よく、着よく、肩よく、小頸やすらに、縫ひ着せめかも、

夏引の白糸は、麻をいふ也、夏引く物なれはなり、ひくとは、麻の皮をはぎて、そのかすを取るをいふ也、今も麻をひくといふ、七斗は七兩をいふと云り、さ衣のさ、是は美稱也、狹き意にあらす、ましめはなれよは、汝の妻はなれて、おのが夫となれと也、いかなる女にかあらん、惡むへし、第二段の歌は、男のそれに答へたる也、汝麻衣は、汝七斗の麻衣をもてるとも也、小くひは、今いふ衣のをくび也、小頸を、むかしは却てくびといひけん、をくびのかた雅也、縫きせめかもは、縫着せんかはマアとなり、この答、衣は新きに如かす、女は故きに如かすの教へにも叶ひて、いとめでたし、第一句、女の輕薄なるに浩歎を發したる、その聲きくかごとし、下句三ッのよく、一ッのやすらをつらね下して、吾妻の極て厚きを寫し、今の女の至て薄きに反映せしめたる、甚た力

あり、

貫河　三段

一〇。貫河のせゞのこすげのやはら手枕やはらかにぬる夜はなくておや避くる夫
二、親さくる夫はましてるはしも然しあらば矢矧の市に沓買ひにかん
三、沓買はば線鞋の細きを買へさしはきて上裳とりきて宮路かよはん

貫河は、三河ノ國にあるよし也、瀬々は、すげの序までにいふ也、瀬々はきよき所なれは、すげにつゞけたる也、すげはすがと同じくすが／＼しき也、すげの手枕は、昔は枕をすげにて作れるとぞ、なくての下、いさをしやなどの意を含めたる也、親避くる夫は、親にかくれて通ふ男をいふ也、瀬々よりすげを出し、すげよりやはらを出し、やはらよりやはらかをいたし、結に至て親避くる夫をいだせる、畫龍点睛、これは女のよめる也、ましては、益してにて、殊の外也、るはしもは、いるはしのい。てもじの韻に含まれる也、さているはしはうるはし也、愛する也、この句、女の口上を受けてとへる也、もの。詞を、上聲に唱へてよむへし、文の上に、その記號なきゆゑ、とりそこなふ也、上のみそかけにせんの處と同し、しかしのし。は助字にて、しからばの意也、さおもふならば、矢矧のまちへ沓買になり、かんはいかんなり、是もにもじの韻に、い。の含まれば也、上句は、女の言を受け、下句は、おのが意をいふ也、是は男の答へたる也、線鞋は、和名鈔に、せんかいの沓は、絁綫兼用て、男女通してはくとあれども、多くは女のはける沓なれは、それを買てたべとなり、今の朝鮮の女沓なり、是は女の男にねだるなり、うはもは、裙裳也、衣の上なるを裙といひ、下なるを裳といふ、と和名鈔に見ゆ、宮路は、三河國の地名也、此段も、上句は男の言を受け、下句は、おのが意をいふ、是は女のまたこたへたる也、三首あはせておもふに、女は貫河在の生れにて、男は宮路の生れ、その途中に、矢矧の市はあるなるへし、三首に一所づつ点じて、その路その所、判然見ゆ、太佳々々

東屋　二段

一、あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ、我立ぬれぬその戸開かせ
二、鎹も扃もあらばこそその外の戸我さゝめ、推開いて來ませ我や人妻

東屋は、借字也、あづまやは、屋根のさきの四方にたれあへる御所造の家をいふなれは、相ツマ屋の義にて、ツマは、物のはしをいふ詞也、衣の妻なといふ是也、鎰は、今もいふかすがひ也、戸ざしは、關の木といふ、是也、我や人妻ならんやの意也、他人の妻ならで、そなたの妻なるをと也、初の歌は、女にあひにゆきし男の也、後の歌は女の也、この女は、男まさりの女と見ゆ、語氣極て活潑也、

走井

走井の小萱刈納め、それにこそ繭作らせて糸引なさめ、

走井は、地名也、伊勢なとにあり、蠶のまゆを作る爲めに、萱を與ふるをよめるなり、

飛鳥井

飛鳥井に宿りはすへし陰もよしみもひも寒み馬草もよし

飛鳥井は、大和の地名なり、みもひは、水を入るゝ器をいふ、それよりうつりて、水をもいふなり、主水をもんどといふは、もひとりの訛也、夏の旅に、馬上にてゆきし人のよめるなり、柳蔭空を掩ひて、寒泉石をわしり、野草路を塞て白馬行かすの景色、寫しえて

清絶冷絶、一讀すれは、六月にも寒を生す、三箇のももじ、極て力あり、

青柳 二段

青柳を片糸によりてやおけや鶯の　おけや鶯の縫ふといふかさ　おけや　梅の花笠や

片糸は、あはせぬ糸也、縫ふといふ笠は、古人にさいひし人のあるをうけてよめる也、さてこの形容は、梅花のさかりに、鶯の木間をあちこち飛めぐるをみ立てたる也、古今に「鶯の笠にぬふてふ梅花折てかさゝん老かくるや、とよめるは、またこの歌をとれる也、いと、よりて、ぬふ、詞の照應味ふへし、美しき歌也、

伊勢海

伊勢海の清き渚に汐が干になのりそや摘まん貝や拾はん玉や拾はん

汐がひは、汐のひかた也、なのりそは、莱苔磯藻の略なるへし、食用の海苔と磯藻とを幷せていふ也、玉は、賀川景樹の説に、石のみがゝれて丸くなれるをいふと云る由、この説に從ふへし、淸きの字、一篇の命根、渚も淸く、莱苔藻も淸く、貝も玉も淸し、

庭生

庭におふるから薺はよき菜也、宮人のさぐる袋をおのれ掛けたり

からなづなは、なづなのからみある也、宮人のさぐる袋とは、火うち袋か印籠ごとき物をいふなり、それになづなの實の似たるゆゑ、おのれかけたりといふ、上の句は、その味のよきを稱し、下句は、その形の面白きを稱せし也、よきの字形と味とのよきをかねたる、上の歌と同一の筆墨、

我門　三段

我門に　わかかとに　上裳のすそぬれ、した裳のすそぬれ朝菜摘み夕菜摘み、あさなつみあさなつみゆふなつみ　我名をしらまくほしからば御園生の　みそのふのみそのふのみそのふの　あやめの郡の大領のまな息女といへ、おと息女とこそいはめ、

我門云々は、大領が女の詞也、ゆふな摘み、この下ににもじをそへて見るべし、上裳下裳のすそまてぬらして、白きはぎのあらはなる女のしどけなきさま、男の目とゞまる處なれは、おのづからその名をしらまく欲せし者のありしなるへし、女はわが夫とすへき人ならでは、ゆめにも、その名をのらざる、是我國太古よりのならはしなれは、この歌も、その心にていと尊し、御園生はあやめの冠詞におけるなるへし、綾女ノ郡は、何國の郡名ともしれざれとも、まさしく丹後の綾部なるへし、その郡の大領が殊の外愛せる娘ぞとこたへよとかしづきの女に云るよし也、まなも、おとも、みな美稱にして、愛娘をいふ也、上裳といひ、下裳といひ、御園生といひ、まな息女といへ、と人に令する、みなその大領の愛娘なるを描寫せろ所にして、その一言一句、みな儼然たる大家の令嬢が口吻にして、終にその名をのらす、その名をしらまくほしからは、大領のまな娘おと娘といへと繰返しいへる、何等の氣魄、眞に是侵すへからさる者にして、百世婦女の龜鑑とすへし、上半篇は色態可掬、下半篇は、峻嚴可畏、

我門を　二段

わか門を、とさんかうさんねるをの子、由こさるらし、由こさるらしや、よしこさるらしや　由なしに、とさんかうさんねるをの子、由こさるらしや、よしこさるらしや

とさんかうさんは、とざまかうざまの音便也、あちらこちら也、よしこさるらしは、よしこそあるらしの約なり、そあの返さ也、さを濁るは非なり、おのが門前をあちこちゆ

きつもどりつ、ねりゆくは、いつこの男ぞ、何ぞ由あることにこそあらめ、さなくば、いかでかかくはすべき、とおのれにこゝろあるを悦へる女の歌なり、上下に由こさるらしといひ、中間によしなしにといひて、その結をおかず、上下の句をを以て、よしなしにかくすへきかはの意をしらせたるなり

大路　二段

一 大路に添ひてのぼれる青柳が はなや 二 青柳が しなひをみれば今盛なりや、今さかりなり

大路は、京の朱雀通をいへり、天子御成のみちゆゑに、大路とは云る也、のぼれるは、青柳のそらにたちのびたるをいふ也、しなひは、したへしなよくたれたるをいふ、昔一條より九條まで、朱雀ノ大路に、柳櫻をませて両側にうゑ給ひし也、「柳櫻をこきませて、都ぞ春の錦なりけるとよめるも、此景色をよみし也、のぼれる、しなひ、盛り、相呼應す、

大芹

大芹は、國のさた物、小芹こそゆでしもむまし、是やこの前盤三太の木のゆしの木の盤、蟲瓶の筒、犀角の賽、平賽投賽、両面かすめうけたる切通し、金はめ盤木五六返し、一六

の賽や四三賽や、

この歌は、古來明解なきを、橘守部入綾に、色々考へて、始て解なしたるやうにいへれとも、智は愚に如かすのごとく、畢竟はそれともうべなひかたく、是れは、疑をかきてよし、たとひ解をえたりとて、よき歌にもあらされば、何を苦みてか物しりがほにいはん、只一言いはんに、初の大芹とは、田の中に生ずるをいひ、小芹は、田のあぜなどに生ずるをいふ、今もその通にて、この小芹は、大芹にくらべて味尤よし、古人もさ覺えしと見ゆ、よりて按ずるに、さた物は、狹田物の義なるへし、この外のあて字は、入綾の説に從て、姑くかけるのみ、

淺水

淺水の橋のとゞろ〳〵とふりし雨のふりにし我を誰ぞ此中人たてゝ御許のかたち消息し訪ふらひにくるや、さ しやのごとくとなふ きんたちや

淺水は、越前國丹生郡の地名也、その地の人のよめるなるへし、橋はとゞろの序也、ふりし雨は、ふりにし我の序也、中人は、中たち也、かたちは、様子也、拍子のさをしや

のごとく唱ふと見ゆ、これにてしらる、後世の軍記文に、武士のいきまきていへる感詞に、しやといへるは、このさなり、歌の意は明なり、

刺櫛

さし櫛は、十まりなゝつありしかど武生の椽の朝に取り夜うさりとり、取りしかば、さし櫛もなし、

是も、越前の人の歌めるなるへし、まりは、あまりの約なり、ようさりは、よさりの延也、今もしか云り、椽は郡司の次官也、その人に取られしと也、今も夫のその妻の持參せし物を、一ッとり二ッとり、終に數盡して使ひはたすものあり、その類の事にあへる女のよめるなり、さしくしもなしといへは、衣裳なとは、第一に取られしと見ゆ、さしぐしの十七斗もありしといへば、したゝかの家の娘なりしならん、さるに、今は一枚のさしぐしだにもなしといふ、全く男に裸にせられしなり、たゞうたのやうなれとも、其詞をよく味へば、あはれなる歌也、上句はその富を寫し、下句は、その貧を寫す、中間にとられし由を叙す、朝にとり夕にとる、日々夜々幾度となく、欺きてとりゆくさま、

見るがごとく、坐に人をして涙を掩はしむ、

鷹子

鷹の子はまろに給ばらん、手にすえて、粟津の原の、み栖栗のわたりの鶉とらせん さ、きんだちや

鷹の子は、いはゆる巣鷹なり、まろは、自稱の詞也、故に古人にまろの名多し、たうばらんは、たまはらんの音便也、粟津原も、みくるすも、みな近江の地名なり、鷹子、鶉、上下相對し、中間飼主と地所とを点す、何の事もなき歌也、

逢路

近江路の篠野小蕗はやひかず、こもりまちやせぬらん、しのゝをふぶき、やさ、きんたちや

篠野は、近江の國の地名なるへし、同國野州郡に篠原といふ所もあり、そこなるへし、そこにつくれる蕗也、ふきをふゝきといふは、花のふゞくによりて名付たるなり、はやひかずは、ふゝきをはやくひきて歸らずばの意なり、是は乳のみ子もてる女のよめるなるへし、意はけふははやく引て歸らねば、子守におはせおける子のいかばかり泣つらん、さぞ子

守のわれをまちぬらん、と心あわたゝしきよし也、「五月女や子のなくかたへうゑてゆく、とよめる句もありて、親の慈悲靄然として、言外にあふる、諸註みなこゝに思いたらす、ありがたき歌を、よしなきことに解なせる、歎くへし、こもりを坊本に、こもちと書けるは、誤なり、先づ所を出し　次にはやひかすを出し、それよりこもりを生じ、さらにしのゝをくりかへし、暗に小蕗に手をとらるゝを恨むるがごとし、悽婉惻々

道口

道の口武生の國府に我はありと、親には申したべ心あひの風、やさ、きんたちや

越國は、北陸道の口なれは、道の口といふ、越前國府は、もと武生にありしと見ゆ、あひの風は、あゆの風ともいふ、東北の間より吹くる風なり、己と心あへる風なれば、何とぞこゝにすめると言づけせしなり、おもふに、是は京の女にて、越前の國府にまかる人にかどはかされてゆき、しる人とては、ひとりもなく、朝夕西望して、親に消息せんとおもへとも、その便なく、せんすべなさに、風におもひをよせし也、句々涙を含む、

交衣

衣かへせん　やさ、きんたちや　我衣は野原篠原萩の花摺やさ、きんたちや

昔は、我と人と互に衣をかへてきたることあり、是は女どちの衣をかへてきん時、おのが衣のよきをいへるなるべし、寥々たる短景の中、野はらしのはらとうち重ねて、いと賑やかなり、是古歌の躰なり、學ふへし、

何爲

いかにせんせんや　をしのかも鳥、いでゝゆけば、親は歩りくとさいなめど、夜妻さだめつやさ、きんたち

鴛鴦も、かものうちなれば、をしの鴨鳥といふ、是はたゞ出てゆくの序のみにあらす、下の夜妻と逢て、その中のむつまじきをいはんとて也、ありくとは、みだりに夜行すと也、さいなみは、さゝへ否むの略也、人を罪することを、さいなむといふもこの義なり、災難の義にあらす、をしのかも鳥、夜妻、上下相對して、一喩一正、をし鳥のごとく、夫婦相氣取にて、夜をふかして歸るさま、宛然目に在り、いかにせんの一句、さいなみと相對して、親のさいなむをもきかす、よしなき女とちぎりしたるをくやむ也、出づれは、

をしとりのごとく、歸れば後悔の念おこる、畢竟後悔の念かちぬるゆゑ、いかにせんと開口うたひ出せるなり、わかき男、この歌を三復して坐銘とすへし、あさはかなるものは、みなこの悔あり、かへすへからす、

鷄鳴

鷄は鳴きぬてふ今朝くら紛れ、下紐の緒に推すがり居てこそ滯ほれ、泣く子なすまて、

是は、女に朝別れて歸りし男のそのきぬ〴〵の別の切なりしによりて、遲なはりしよしをよめる也、鳥はなきぬてふは、一番鳥のなくといへると也、その朝のまだくらきうちに別れんとする也、下紐は、下裳の紐也、緒はこれも練緒のをと同く、輕くそへたるまて也、滯るは、女のすがりつきてとゞめたるによりて、おそなはりしよし也、泣く子なすは、泣く子のやうになきて也、是らも、何かふかき事情のありて、女の是非なくとゞめたるを、そのまゝうちずしたる歌なるべし、

老鼠

西寺の老鼠若鼠おん裳つむづ、袈裟つむづ、法師に申さん、師に申せ、

此歌奈良朝の人のよめるならば、西寺は西大寺をさすなるへし、西大寺は、東大寺にむかへて云るなり、平安の人のよめるならは、今の東寺にむかへたる西寺をさすなるへし、その西寺とは、拾介抄に、西寺は九條前少僧都慶俊とあるそれにて、慶俊のすめりし寺也、つむづは、つみつの音便にて、穗をつむなどいひて、かむことをいふ也、法師は、坊主といはんがことし、師はその師の法師也、是は今俗にいふ大黑のごとき者の寺にゐて、寺の物を盜出したるを、寺男のみて法師に告げ、法師より和尙に告げしめんとて、鼠にたとへていへるなるへし、鼠をねすみといふは、ぬすみと音通にて、物をぬすみかじるものなれは、ねずみといふ、されば、梵嫂に老若の二人もゐて、互に心をあはせて私しけるを、老鼠と若鼠とにたとへしならんか、この老若に必意のあることとなるべし、老鼠に若鼠、裳にけさ、法師に師、兩々相對す、これに西寺を冠らせたる、一頭六脚の躰也、

隱名

くぼの名をば、何とかいふくぼの名を何とかいふ つびたり、けふくなう、たもろ、ひの中のひ、つくめ、けふくなう、たもの、

くぼの名は、くぼの本名はとさふ也、すへて、男女の陰部をくぼとも、ひともいふ也、くぼは、こもると同義にて、かくれたる所をいふ也、窪をくぼむといふも、同し義也、ひは、もと女陰をほとといふ、これを返せはほ也、このほをへとも、ひともいふ也、以上は男女に渉りての陰名なり、つひたりはつひの垂るなり、陰莖をいふ、たりをさありの約とみるはわろし、これは名詞なり、名詞のみをあぐるにこれのみ動詞を加ふる理あるへからす、けふくなうは、毛脹嚢(けふくなう)にて睾丸也、たもろは、たりもろの略なり、俗に陰莖のたれたるを、だんべといふ、たりへの訛也、もろは、今まらといふ、垂りまら也、以上は、男陰の雅名をあげたる也、ひの中のひは、女陰をいふ也、女陰は、陰のうちの陰にあれはなり、つくめは、口をつぐむなといふと同しく、ふさぐ義也、女陰は、尤ふさぎてかくす物なれば也、以上は、女陰の雅名をあげたる也、是等を宴曲にうたひしは、今の因州因幡の類にして、眞に是一時の座興にして、巴人の調なり、されとも、その歌もたゞ古への陰名のみをつらねたる者なれば、其頃にても、はや人の耳に遠くて、いやらしくもきゝぐるしくもなかりしなれば、因幡の類ながらも、それにくらぶれば、遙にう

ちあがりたるさまおもふへし、これを律の最尾における、編者の微意なるへし、

呂

安名尊　三段

一あなたふとけふのたふとさや古へも　はれいにしへも二　かくやありけんや　けふの尊さ　あはれ三
そこよしやけふの尊さ

清空一氣、風調絶世、あな尊ふと、蓋大甞會のとよのあかりなどにあひ奉れる人の感のあまり、よみいでたるなるへし、いつれのめでたき席にても、うたひてよきなり、

新年　三段

一新しき年のはしめにや　かくしこそ　はれかくしこそ二　仕へまつらめや　よろつ代までに　あはれそ三
こよしや萬代までに

是は、聖武天皇天平十四年正月十六月、天皇大極殿にいてまして、群臣に宴を玉ひ、また天下有位の人、幷に諸史々生にも、宴を玉ふ、こゝに六位以下の人たち、琴ひきて、この歌をうたひけるよし、續日本紀にみえたり、かくしこそは、毎年々々かくのごとくしてこそなり、聖恩の辱さに、覺えす出たる眞の歌なり、古今集大歌所に、大なほひの歌として、下句を千年をかねてたのしきをつめ(積)とせり、

梅枝　三段

一むめが枝に來ゐる鶯や春かけて　はるかけて二　鳴けどもいまだや雪はふりつゝ　あはれそこよしや三
雪はふりつゝ

春かけてといへは、冬より來ゐることしらる、春色の遲きをよめる也、

櫻人　二段

一櫻人その舟ちゞめ、島つ田を十まち作れる、見て歸りこんや　そよや　さす歸りこん、そよや
二言をこそさすとはいはめ、遠(をち)かたに、妻ざる夫(せな)ふれば、明日もさねこじ、や、そよや　さすも
ねこじ、や、そよや

櫻は地名也、下總の佐倉といふ所も、櫻なるべし、ちゞめは、一本に、とゝめとあり、一音の轉にて同義也、島ツ田は河中島の田也、十町は多くの田也、さすは、さあすの約にて、明後日也、さをとゝ年、さ來年、なといふさ也、言をは言になり、さすとはのさ

すを、原本にあすとかけとも、さすの誤なるへけれは改む、上文の詞を受けたる也、妻ざるは、妻ぞあるの約也、濁るべし、ざるを避くると同じやうに見たる説はわろし、さくるは他動詞也、他動詞を自動詞に用ふること、古へにはなきこと也、後世去狀といふも、妻を去るの義にあらず、妻の去狀(いに)といふ義也、神代紀に、避の字をさるとよめるも、去の義にかりたる也、自他をかねたる詞にはあらず、さねは、さだめての義也、必すといふほどの意也、一段は、男の歌、二段はその妻の歌也、歌の意は、明後日歸るとこそは申してゆけ、あのかたにおもひ妻をばおける人なれば、あすも定めてこし、明後日もこじ、しあさつても歸りこじと妬める也、さすとはいはめ、さすもこじ、首尾照應、中間に、こざるゆゑをのぶ、許多の怨恨、

葦垣　五段

一葦垣(まかき)まかき　かきわけて、踏越すと追越すと、はれふみこすと[二]　誰れかたれか　この事を親にまう、讒(よこ)し申しし、[三]轟けるこの家このいへのおとよめ、親にまうよこしけらしも、[四]天地の神かみも　そうしたべ　證　我はまうよこし申さす、[五]菅の根のすがな　すがなきことをわれはきく　我は聞くかな、

あし垣まがきと重ねて書ける、大家の二重にも三重にも垣したるよし也、ふみこすは、男のしのび入る也、追越は、女のあとおひて男に從ふなり、とゞろけるは、名のきこえたる大家の形容也、おとよめは上にもみえたる、父母の寵愛せる夜女の義にて、妹也、まうよこしは、申し橫すの義にて、言を橫しまにする也、讒言也、天地の神とも云々は、神祇にちかひし也、弓矢八幡も御知見あれといへる類也、男にも女にも此詞のある、是太古以來の風敎にして、いさゝかの僞もなきことを、天神地祇にかけて誓ふ也、證は音しやうなれとも、それをそうともよめる也、菅の根は、すがもなきの冠詞、すがは、今すげといふ、菅をすげとも、すがともいふと同しく、すげなきことを、すがなきともいふ也、すがなきは、心のすが〳〵しくなき義也、今いふすげなきは、つれなき義に用て、こゝと聊たがふやうなれとも、畢竟は同し義におつる也、さてさがなきといふもすがの轉なり、この歌、三段までは、男のよめるにて、四段以下は、弟婦(おとよめ)のよめる也、第一段は讒者の口吻、詞かさ高にいへる也、二段は男の怪訝、三段は、男の推測、四段

は女の潔白、上句は神に誓ひ、下句は斷言、五段は女の無念、よこしとすがなき、一篇の關鎖、何等の局法、さて此歌を按ずるに、今にも此事は世上にありがちの事也、姉娘の男をもつと、妹娘の口さがなき、とかくあしさまにいひなして、親に告ぐる、それより夫婦の間も面白からすなりぬる、古今人情にかはりなし、されば、此歌の男も、かやうに横しごとするは、必定かの妹の惡口にいづるものとおもへるなり、しかるに、その推測あたらず、その妹といふは極て心の赤き人なりし故、この後段の歌はありし也、

山城　三段

一山城の狛のわたりの瓜作、なよやらいしなや、さいしなや、うりつくり、二うりつくり、はれ、うりつくり我をほしといふ、いかにせん、なよやらしなやさいしなや三いかにせん〳〵はれいかにせん なりやしなましうりたつまでにやらいしなや、さいしなや、うりたつ、まうりたつまでに

狛は、山城國相樂郡也、瓜作は、百姓也、なりやのなりは、妻になる也、うりたつは、うりのなりたつ也、までには、それまてさためんと也、今思案中ゆゑ、いかにせんといふ也、なりたつを割て、なりをおのれにかけ、たつを瓜にかけたる、妙々、

眞金吹　二段

三眞金吹く吉備の中山帶にせるなよやら、いしなや、さいしなや帶にせる〳〵、はれ、二おひにせる細谷川の音のさやけさやらいしなや、さいしなや、おとのさやけさ

眞金吹くは、よき金を吹分くる也、吉備の冠詞、吉備の國よりよき鑛物を出せる故、この冠詞ある也、備前鍛冶の世々に絕ゑざりしも、故あること也、中山は長山と同義にて、古へは互に用たり、山陽山陰の山脉長き故、長山といふ、それを、昔は濁らぬ故、中山と書ける也、此歌。古今集大歌所にも出づ、帶にたとへし故、中といひ、細といふ也、

一氣呵成、その地見るかことし、

紀伊川　二段

一紀ノ國のしらゝの濱に、眞白らの、濱に來てゐる鷗はれ その玉持來二風しも吹たれは、波凝りしも立てれは、水底きりて、はれその玉みえず、

しらゝの濱は、紀ノ國牟婁郡にありと云り、かもめは、鴫女の義なれは、海人をこれにたとへし也、なごりは、風のふきたるあとに、波の殘りてたてるを云といへり、きりては、

水底のにごりてくらくあるをいふ、霧をきりといふも、本動詞を名詞にしたるにて、霧たてば、くらくなるゆゑ也、此歌上一段は、海人にいふ詞、下一段は、海人の答、風しもなごりしも、相對す、

葛城

葛城の寺の前なるや、豐浦の寺の西なるや、榎の葉井に、しら玉しづく、眞白玉しづく、おゝしとんぞ〱しかしては國ぞ榮えんや、吾家等ぞ富せんや おゝしさんぞ、おゝしさんぞ〱、

此歌は光仁天皇のいまだ御位につき給はざる時の童謠なり、續紀卅一に見ゆ、それには、葛城ノ寺の前なるや豐浦ノ寺の西なるやおしさど、としさど櫻井に白壁しづくや好壁しづくやおしとどとしとど、然せば國ぞ榮ゆる吾家等ぞ榮ゆるやおしさど、さしさどとあり、これを樂府にいるゝ時、いさゝかづゝ改められたる也、一首の意は、天皇の御名は白壁と申して、井上内親王を妃とし給へは、この天皇にして、御位につき給はば、御門も榮えまし、我等が家も富ぬへし、といのりし謠也、扨葛城寺云々は、入綾に云、行嚢抄に、元興寺ハ飛鳥村西南久米寺へ行ク方ニアリ、豐等村ノ内也、昔ハ四方ニ四門ヲ建テ、四ノ額ヲ掛

タリ、扁ニ、東門ニハ飛鳥門、西門ニハ葛城寺、南門ニハ元興寺、北門ニハ法滿寺と云、境内方廿二町余、坊舍數十宇有シト也、今ハ僅ニ二間三門ノ瓦葺ノ御堂ニ、御丈一丈ノ釋迦佛ノ銅像一躰、昔ノ餘波ヲ留メタリ、豐浦寺ト云是也云々、されば此寺は、東門は飛鳥に向ひたる故に、飛鳥寺と云ひ、西門は葛城に向ひし故葛城寺といひしなるべし、云々といへり、これによりて按ずるに、豐浦寺は元興寺の總名にして、葛城寺は、その内の一名也、その寺の前といへは、西の方にして、豐浦寺の西といふと同じことなれは、歌のしらべによりて、同し事を詞かへていへるのみ、されば、櫻井のありし所は、此寺の西にして、久米寺にゆくかた也、いにし都のありし所にして家並も白壁たちつゞきて、うつくしかりけん、そこに内親王もましまし、天皇も龍潜の程は、そこにすみ給ひけん、殊に史をみれは、勝寶このかた、儲貳ましまさず、親王たちの中にも、かれこれうたがはれて罪せられ廢せられし方多く、これによりて天皇も奇禍の及はんことを深く慮り給て、朝夕酒をほしきまゝに聞召して、行跡をかくし給ひしよしみゆれば、この童謠は、その有樣を見奉りて、さてはかくつゞけたるなるべし、それを一々事實にあつれは、葛城寺の前

は、天皇と內親王との御在所を示し、櫻井は內親王の御名井上なれば、櫻井にたとへ、白壁は天皇の御名なれは、あらは也、しづくは、しりつくの略にして、水にうつる也、是天皇の內親王を妃として酒にひたり給ふに譬へしなり、しかしては、この天皇の御位に即給はゞと也、上に櫻井といひ、白壁といひおきし故に、國家榮ゆと結ひし也、此樂府には、所々かへられたれとも、本の歌にはしかず、

竹河 二段

竹河の橋のつめなるや、はしのつめなるや花園に、はれ、花園に我をばはなてや、やれわれをははなてめざしたぐへて

竹河橋は、伊勢國多氣郡にあり、昔齋宮のありし所にて、今に其處に竹河も花園村といふもありて、各其名殘りたり、その由行囊抄に、いと委く記せりと入綾に云り、されは、花園は齋宮のにて、竹河の橋のつめにありしと見ゆ、はなては、そこにおけと也、めさしは、神樂にも云る如く、童女也、たぐへては、なぞらへて也、齋宮に仕まつる女どもの有樣をみて、我をもその花園の掃除だにも仕まつるへく、童女になぞらへて召使はれ

たし、とさる女の美みて詠めるなるべし、抑その女は、身の賤からぬ人の娘などにて、何にか心に叶はぬ事のあるより、一層齋宮に仕へて、一生男にもあはでありぬへしとおもへるなるへし、めさしたぐへてといひ、齋宮の花園にはなてといへるに付て、その內情をさぐるへし、たゞおきてといふを、いかでかはなてとはいはん、必右やうの事情ありてこそ、はなてとはいへるならめ、花園、はなて、めさしたぐへて、着眼、

河口 二段

河口の關の荒垣や、せきのあらかきや守れともはれ、まもれとも我禰ぬや、いて、われれぬや關の荒垣

河口關も、伊勢國と云り、荒垣は、その左右に木をならべ立て、人の越られぬやうにかまへたる垣をいふとぞ、出て寢ぬは、そのあへる婦と寢るをいふ也、此歌を、みな女のよめるとせるは、何によりてさたむるにかあらん、男と定むるも、據はなけれとも、男より女の處に通ふは、昔の俗なれは、姑く男の歌とすへし、此男は、伊勢の人なるへし、故にその地の關を捉て、守るにたとへし也、守るとは、見守るにて、親のその男を監する也、せきの荒垣首尾關住、その監督の嚴しきを寫す、その嚴此のことくにして、

倘忍出てあらぬ女とぬる、うはき者の淫蕩、以ておもふへし、

此殿　二段

一此殿はむへも　むへも　富けりさき艸の　あはれ、さき草の、はれ、さき草の二　三つばよつばのなかにに殿造せりや殿造せり

さき草は、三俣といふ物なり、その皮はぎて紙を造る也、三俣になりて生ずるゆゑ、かくいふ、こゝち三つといはん料に用ふる也、且家の富めるに、幸草（さき）の意あれは、かた〳〵よし、三ッば四ッばは、三重四重といはんがごとし、三四と云るにて、その富めるさま見ゆ、調もよく、めでたき歌也、新築の祝などに至極妙也、

此殿　二段

一此殿の奥の酒屋のうはたまりあはれ、二　うはたまり、はれうはたまり、われた我をこふらしこさかこえなるヤ、こさかこえなり

この歌諸註に色々といへとも、みなあたらす、疑を闕て可也、ろくなる歌にもあらず、

鷹山　二段

一たか山に鷹を放ち上けておく緒なみあはれ、おくをなみ、はれ二おくをなみ、わかすわかする時にあへる夫（せな）かもヤ、あへるせなかも

おく緒なみの緒は、鷹の足につけて放ち上けおく紐を云、なみは、その紐のなさにの意也、わかするは、わびするを正しく寫しひがめたるなるへし、上のなみを、この詞につゞけて、その紐の無さにわびするごとくとなり、一首の意は、鷹山に鷹をはなちがひにするに用ふる紐のなきがごとく、わがおもふ夫に縄つけて、とゞめおくべきにもあらず、こゝかしこと女にまよひゆくを、いかゞすべきとわびするほどに、ゆくりなく歸りきて、またもあへる夫かもと、思の外にあへるをよろこひし女の歌なり、このやうの男にあへる女は、一生涙を目にたやすまじ、はなち、あへる、上下呼應、

美作　二段

一美作や　くめの　久米の皿山さら〳〵になよや、さら〳〵になよや、二　さら〳〵にわかな我名はたてじ萬代迄にや、よろつよまでに

古今集大歌所にも出せり、名はうき名也、男女ともに、この鐵心石膓なかるへからず、

この歌をよめる人、いかなる人にかありけむと、千載の下より、想像にたへすなむ、上の句は、さら〳〵の序也、久米は地名、

藤生野　二段

一藤生野の　かたち　形か原に標はやしなよや、しめはやしなよや、二しめはやし、いつき　齋ひし著く時に逢へるかもときにあへるかも

藤生野は、山城國相樂郡に藤生村といふ有といへは、昔はその邊を藤生野といひしなるへし、形原は、その野中の名なり、標はやしは、標を長く引延はす也、いはひしも著くは、御祖の神を齋きまつり、いかで御世にあひて、家の風をも起させ給へと、朝夕いのりしそのかひありて、このありかたき御世に遇へるかなとなり、按に是は藤原氏の人の歌なるへし、藤生野に、祖神を祭りし事なしや、尋ぬへし、標はやし、いはひし、皆神社を設けて祭れるをいふ也、はやしは、はへと同義にして、一は波行に活き、一は左行に活く也、

妹とあれど

妹とあれど、入るさの山の山あらゝぎ、手などり觸れそや香をまさるがにや、かをまさるがに

妹は、おのがめづる女を稱する詞也、妻は、夫の尤めでいつくしむ者なれば、妹といふ也、こゝは妻としてめづべき女とあれども意也、諸註、あれを我とみて、妹と我とゝして、解せる故、下の句意も、終に解しえざりしなり、わらふへし、入るさの山は、いづこの山ならん、古來明らなざれとも、山ノ名なること明なり、あらゝぎは、辛夷也といふ、辛夷は、こぶしはじかみとも稱して、その子くらふへし、と和名鈔に見ゆれとも、この入佐の山に、おふるあらゝぎといふは、その香いたりて強く、くらふこともならぬものなるへし、それゆゑに、手にもとりふるゝなといへるなり、香をまさるがには、香のいたりて他にまさるが故にとなり、香がといふ所を、昔はをといへりしこと常也、あるがといふへきをあるをといふ類なり、此歌はたとへにて、その意は、あの女はうるはしけれは、妻としてよからんとあれど、それはたとへば、かの入佐の山におふる山辛夷のことし、その香は他にまされとも食ふへからす、たゞ山にあるを詠むべし、それと同じく、此女は人の妻としてはよろしからぬ也、色香のまされるも

のは、その心恐るへし、古人も舌に蜜あり、はらに劍ありといへり、ゆめその色香にまよひて妹とし玉ふな、一時の迷は百年の不幸となるぞかしと戒めたる歌にて、かの俗歌に、手にとるなやはり野におけ蓮花草とよみて、人の娼妓を受出さんとしたるに贈りたるは、全くこの歌より脱化したるなり、眞に是男女百世の寶訓なり、起句一言正意、以下喩意に入去る、絶妙の句法といふへし、

淺綠

淺綠こい花田、染めかけたりとみる迄に、玉光るした光る、新京朱雀の垂柳、または田井所なる前栽秋萩撫子唐葵したり柳

淺みとりは、うす綠也、濃い花田は、深綠也、色の濃淡を淺深もていへり、花田色を、今は略して花色といへり、花色は、青の薄きをいへは、こき花田といふによりて、深綠となる也さて染は、上の淺綠にも花田にもかけてみるへし、その色にそめたる絹布の類を、空にかけたると見る迄との意也、そめかけは、そめいだしと見るはわろし、それにては、かけの詞用なきこと也、した光るのしたは今いふひた物のひたと同く、光りの一層甚しく光るをい

ふ也、新京は、平安城をさせるなるへし、田井所は、今いふ田舍なり、ゐなかは、田井中の略也、なるは形容にて、田井所なるは、田舍風の義也、上半は上に見えたるごとく、朱雀通に植ゑられし柳をもて、春の景色を寫し、下半は、田舍風の前栽を以て、秋の景色を寫し、結末に再垂柳を点じて、秋の景物を、春の景物にて包擁したる一種の奇格、

青馬

青の馬、放れは取繋げ、さ青の馬、放れば取つなげ、篠射眞矢の、いさやの眞雄子が彥孫なる、眞郎子、ま、大膽子の、大氣の童の、眞雄子が彥孫なる、眞郎子、

此歌は、入綾の說に從て解すべし、されとも、尙ときたがへたる所なきにあらす、今愚案を加へて、かく漢字をあてたり、青馬は、正月節會の馬也、春は陽にして、方は東、色は青を尙ふ、故に青馬とは云るなり、白馬とかきて青馬とよめるも、わが邦の白は眞の白にあらす、青をふくめる故也、馬あれて放れたらば取つなげといふ、勇者ならでは、悍馬は御しがければ、大膽子に命する也、眞青は、今いふ眞ッ眞青なり、まといふも、さといふも、みな美稱にして、青のいたりて深きをいふ、複筆を用て調らぶる也、篠射眞矢

は、篠竹にて作りしよき矢をいふ也、篠といふは、木矢も、むかしはありし故也、木矢は後々までも、北海道には用ひたり、眞雄子は、勇士といはんがごとし、弓を射るに達人の勇士也、万葉に、「紀ノ國の昔弓雄の鳴矢もて、鹿取りなひきし坂ノ上にぞあるといふ歌もあれは、こゝの射さやの眞雄子は、この弓雄の坂上といふ勇士の彥孫なるへし、時代相近し、眞郎子は、眞郎子を音便に唱ふる也、稚郎子なといふ郎子にて、わかき男子をいふ也、眞大膽子は、大膽不敵の男ノ子の義にて、その上に眞を加へたる也、眞は、今もいふ詞にて、この一言切てよむべし、眞大とつゞくるはわろし、後世には、漢字にマをそへていふことなきにしも非されども、いにしへにはなきこと也、大氣は、今も氣の大氣なるなどいふそれ也、此歌逆叙法にて、上二連の句を、結末に廻して心うへし、眞郎子、大膽子、大氣の童、口を極て青年の壯士をほめし也、しのいさや云々、その子を證するに、その親の勇士を引き來る、將門に將種を出せるさま見えて、尤力あり、是一連、大膽子の云々は、また一連にして、長大句を用ひ、上の短句と相配して、曲々趣をなす、妙、今日白面書生の作れる鄙俗の歌を、小中學校に用ふる、一般のならひなるが、かうやうの

歌にふしはかせ付て歌はしめたきものにこそ、

妹か門

妹か門や夫か門行きすぎかねてや わがゆかば ひぢ笠の ひぢがさの 雨もや 降らなむ してたた
さ 雨宿り 笠やどり 宿りてまからむ してたをさ

この歌は、古今六帖に、「妹か門行過かねつひぢがさの雨もふらなんあまがくれせんとあるをのべたる也、さて六帖のは、万葉十一に、「妹か門ゆきすぎかねつ久方の雨もふらぬかそをよしにせんとあるを、聊かよみかへたる也、久方を、ひぢかさとよみたがへたる、尤改むへきを、後世終に一種の詞としてよみならへるは、何となく此詞の雅にきゝなさるゝゆゑなり、されとも理になきことなれは、改むへし、かねてゃは、かぬるよなといふほどの意也、まかるは、退くの敬語也、おもふに、是は、公達の朝よりまかる時、妻とする意中の人を、道すがらとはんとするもよしなくて、雨にてもふらは、笠かりにたちよらんものをと願へる也、上三句は、實、その以下は虛、虛實相救てよし、また初二句は、男女互に云へる詞としたる也、男よりかくおもへることは勿論、女よりも、かく願

ふことなきにしもあらねばなり、してたをさは、郭公の一名として、後世は用ふれとも、こゝは拍子の詞也、尤もさみだれの頃の歌なるべければ、この詞を郭公とするも、また袖中抄に、しづの田長といふ說にしても、雨に映して、いと趣あり、田長は、和訓栞には、田業(たわさ)の義とせる、是本義なるべし、郭公を勸農の鳥とすとかや　古今集誹諧に見えたるはこの趣なり

席　田　二段

むしろ田の　や、むしろたの　いつ貫河にや　住む鶴の　いつぬき川に、や、すむつるのすむつるの、や、すむつるの　千年をかけてそあそひあへる　千させをかけてそあそひあへる

むしろ田は、むしろを作る藺など作る田をいふなるへし、席田も、いつぬき川も、みな美濃國の地名也、田中道丸云、いつぬき川は、大野郡より出て、席田郡をすぎ、本巢郡の墨俣(すのまた)川に入る、今俗に糸貫河といふとなり、糸ぬき、本名なるへし、それを、京の人きゝあやまりて、いつぬきとなへし也、そあそひあへると、かゝり詞のそをしたにつけて調へたる、いとめつらし、吾おもふに、このそを濁りて、今は詞のしりに加へて用ひぬれとも、そはそも〳〵後の事にて、古へはすみて、別にはなして、詞の間に用ひたるにや、この歌なとは、全くそのよし也、さてこのそを、今はさといふ也、是がさなといふ、是也、されば詞のしりにつくる詞にはあらず、獨立の詞にて、それやがてかゝり詞となれる也、此歌は、鶴の遊へるをよめるにて、寄鶴祝の歌ときこゆ、

大　宮

大宮の西の小(こ)ゝ路(ぢ)に菖蒲(あやめ)籠(こん)たり眞菖蒲(さやめ)こんたりたりやりたんな

小路を、こんぢといふ、音便也、眞菖蒲は、さあやめの略かれたる也、眞青(さめ)の馬といふに同じ、菖蒲をほめたる也、こんたりは、こみたりの音便、此歌はたゝ歌にて、何の意味もなし、

總　角

あげまきや、とう〳〵　尋(ひろ)ばかりや、とう〳〵さかりて　寢たれども轉びあひけりとう〳〵か寄合ひけりとう〳〵

是は、ゆくりなく夫婦となれるよしをよめるなるへし、總角は、上にもいへるごとく、十六七才の童女なるへし・そのやうの女と一間に寢たるなり、初は一尋はかり遠ざかり

て、床とりたる、いとやさし、この遠慮なかるべからす、さかりは、避かりなり、遠ざかる也、まろひあひは、ころびあふ也、わかき男女なれは、互にいねのわろくて、いつしか両方よりころびあひける、實際のさま面白し、かよりあひのかは助詞にて、かぐはし、かきゆる、など云かなり、終によりあひて、夫婦のまじはりせしと也、今も心のあへる男女の初は、つゝましげなるも、はからず夫婦となれる類、世に多し、みなこの類也、愼むへし、戒むへし、

本滋　二段

本しげきもとしげき黄備の中山昔よりむかしからむかしから名の舊りこぬは今の世の爲めけふのため

本しげきは、ふもとの木のしげき也、黄備のきを木とみての冠詞也、ふりこぬは、吉備の中山の世にはやされて陳腐にならぬをいふ也、それも、今の御代のけふ用ひらるゝ爲め也、と大嘗會などに黄備より何か献りしものをよめるなるへし、昔、今、相對し、しげき、ふり、相應ず、

簑山

簑山にしゞに生ひたる玉柏、豐の明にあふが樂しさ、あふがたのしさ

是も、右の歌と同一の歌也、大嘗の宴樂に、この簑山の柏を用ひられしをうたへる也、本抄に、承和帝大嘗會悠紀の風俗歌也と見ゆ、しゞは、茂み也、柏の葉は、この祭に専用らるゝ物也、

眉刀自女

御馬草とり飼へ眉としめまゆとしめ〳〵〳〵〳〵

御馬草をとりて馬かへと、眉とじめに令する也、眉とじめは、老女のその眉を掃はぬをいへるなり、是らも、例のたゞ歌なり、

飲酒

酒を給うべてたべゑうて、たんと轉んぞまうで來る、よろぼひぞまうでくる、たんな、たりやらんな、たりらりら、

是は豐明などに、御酒を多く賜はりて、醉よろめきて、拜舞して出づるをよめる也、給

べては、今のたべて也、たべゑうては、給醉(たうへゑ)ひて也、たんとは、今のどんと也、轉ぶ音也、轉んぞは、轉んでぞ也、まうでくるは、舞(まひ)て來る也、よろほひぞも、よろぼひてぞ也、みな、てもじを加へすとも、それときこえしと見ゆ、醉倒れの狀、見るがごとし、

田中の井戸

田中の井戸に光れる田葱(たなぎ)摘め、吾子女(あこめ)、小吾子女(こあこめ)、たらりらり、たなかのこあこめ

田中の井戸は、田畝の中にある用水をいふ也、井戸は、井所の義也、田なぎは、和名鈔に、水葱をなぎとよめり、水葵といふものにして、昔は食用にしたりと見ゆ、光澤あればひかるといへり、吾子はしたみ詞也、小吾子女は、吾子女と同し、小むす女を云る也、是もたゞ歌也、

無力蝦

力ない蝦(かへる)骨ない蚯蚓(みみず)

上下貴賤の氣節なきを罵倒して痛快、いはゆる寸鐵殺人もの歟

難波(なんは)海

難波の海なんばのうみ漕もて登る小舟大舟つくし津までに今すこし上れ山崎までに、

筑紫津は、難波海と山崎との中ほどにありし地名とみゆ、今その所しれがたし、山崎は、山城の山崎也、つくし津までには、大舟、山崎までには、小舟を隔てゝ承く、小舟は山崎まで上ることは出來れとも、大舟は、つくし津までよりは上ること叶はぬ也、頂針廻環法を味ふへし、諸註は、みな文法をしらぬ故、句意を誤ること多し、

鈴か川

すゞか川八十瀨のたきを、皆人のめづるも著く、や、時にあへる時にあへるかも

たきに、堅横あり、空よりおつるを瀑布といふ、多くの瀨よりおちたぎるを瀧といふ、八十瀨のたきは、いはゆる瀧也、是もさる宴會に歌はれし也、

石河　三段

一石河の高麗人(こまうど)に帶をとられて辛(から)き悔(くい)する二いかなるいかなる帶ぞ、花田の帶の中は絕えたるか三やる、かやるか、なかはたえたる

石河は、河内國の郡名也、そこにいにしへ高麗人をおかれしより、その子孫をも、高麗

人といひしなるへし、それに帶をとられて、つらき後悔したると也、二段は、その帶の問答也、身もつくろはであひたるに、中の絕えたる、花田染の帶とりかくされたるよ、といたく耻ぢてくやみたる女の情、さもありぬへし、中はたえたると、不了の語をもて結ひたる、餘情嫋々、

奥山

おく山に木きるや小父、木をやは削づる、眞木やは削づる、木削る小父、

小父は、父の兄をいふ、それより男の老たるをひろくいふ詞となれり、今も老人ををぢさんといふ是也、物を一ッ言ひて、さらにかさねていふ時、まといひ、さといふ詞をそふること、この外、右に多く見えたる、おやめ、さやめ、あを、さを、の類也、是にて、大小、淺深、輕重、精粗、を並擧せることゝなるなり、妙也、味ふへし、木きるをぢは杣人也、

奥山

おく山に木流す汝が木か、小父木やと木やと木ッやは削ッづる、眞木やは削ッづる、木削づるをぢ、

此歌も、右と同じく、詞をのべていはゞ、おく山に、けふ木を谷川に流す、あれはそなたが木歟、杣のおやぢがわが木やゝゝゝと夛の木を削づり、よろしき木を削づる、あの杣のおやぢよと、川へだたてとひつゝながめたる歌也、汝をサともシともいふ也、木やを、きうやといふも、歌ふしらべによる也、

我家

わか家は戸張帳をも垂れたるを、大君來ませ聟にせん、御肴に何よけん、鮑榮螺か、石陰子よけむ、あはひ、さたなか、かせよけん

とはり帳は、帳、とばりなり、されとも、帳に、とはりならぬもあれは、こゝは戸にはる帳といふ意にてよめる也、昔は聟君となるるものは、みな女の家へまづゆきし者なれは、親もその娘の爲めには、家をつくろひ、道具もそなへて、聟を招く也、さて妻となれる女は、みな帳のうちにゐて、かりそめにも、あだし男に、面もあはせぬがならひなり、されは、その帳をも設けたること、戸はり帳をもといふにてしらる、大君は、親王諸王

をみなきみといひ、そのやうの人ならでも、貴顯の人をば、尊みてみなきみと云ふを、さらに聟君とする心より、大の字を加へたる也、後世の御の字の心なり、さてその婚禮の御肴には、何よけんと、夫婦の契せんにちなみたる貝類を、三種あげたる也、昔はさゞえを、さたをともいひけん、かせは、漢名石陰子、今東國にいふがせと云貝にて、うにの類なりと云り、兩親の心盡し、言外に見ゑたり、此催馬樂は、夫の妻を愛する歌に始て、親の娘の爲めに聟どりする歌に終る、おのづから支那の詩經の體にも似て、編者の微意、いとゆかし、すべて、兩親のよく撰ひてとりたる聟君にして、始て我駒の歌のごときよき男にもあひぬへし、さなくて、高砂の歌のごとく、何の深き慮もなく、男女の色香にまどひてあひたらんは、必總角の男女ともなりて、悔のやちたび、石川の中も絶たる帶の類たらん、すべて歌ほど面白き物はなし、殊に緒言にも云へるごとく、古歌は、すへて眞をそのまゝによめる者にして、いはゆる言ふ者は罪なく、聞く者は戒むるに足るの謂なるを、そのよきをすてゝ、あしきにならへはこそ、誨淫の歌ともなるへけれ、前車の覆へる所、後車の戒むる所とみて、親もこゝろし、男女もその身の戒とした

らんには、いかなる徒ら歌も、みな是れ一生の金科玉條ともなりぬへけれは、この心にて、古歌は味ふべきにこそ、

明治三十六年夏六月朔、浪華清水溪萬年書屋東窓の下に書畢ぬ、時に風雨ふりくらし、乾坤閉塞す、

稼堂陳人

萬葉百首短評

萬葉百首短評

萬葉百首短評

春

巻十春の雜歌

久方の天のかく山この夕かすみたなひく春立らしも

物候を見て、春の立つをしる、曆以前の歌なるへし、久方云々は、霞たなひくを呼起し、この夕は、春立らしもを呼おこす、このとさす、必さすよしありしなるへし、さらではこの詞むだ也、

同巻霞をよめる

昨日こそ年は暮れしか春霞かすかの山に早立にけり

昨日の詞をいたして、今日の詞をかくし、歳暮、春立、兩々相對す、春霞、春日、頂針廻環、古今集に「きのふこそ早苗とりしか、いつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く、彼は時の早きに驚きし也、是は時の來るを喜べる也、

同卷春雜歌

子らか名にかけのよろしき朝妻の片山岸に霞たなひく

子は、女子をいふ也、かけは、吾妹子なといふに、朝妻といふ詞をかけあはせてよろしき也、上句は、朝妻の序也、朝妻は、よる忍ひあふ夜妻に對して、朝まて人にも憚なくあひ見る妻なれは、尤よろしき也、

同卷鳥をよめる

梅か枝に鳴てうつろふ鶯のはね白妙にあわ雪そふる

春のたちかへりて寒きをよめる也、見るかことし、此歌に題するならは、春雪をよめるとあるへきなれと、姑く舊に從ふ、

同卷野遊

百しきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝに集へり、

あれやは、あればやのばを略せる也、こゝは、野をさす、上代の長閑なるけしき、宛然目にあり、梅をの一句、姿態横生、下句を、櫻かさして今日もくらしつ、とせるは、平安朝の

人直しゝなり、櫻の復古なり、

卷八山部宿禰赤人歌

吾夫子(せこ)に見せんと思ひし梅の花それとも見えす雪の降れゝは

早春のけしきをよめる也、梅の花のかくるゝまて、たちかへりて雪のふる、今もある事也、結句いひすてゝ、餘情不盡、

明日よりは若菜摘まんとしめし野に昨日も今日も雪はふりつゝ

是も、右に同じけしき也、高朗誦すへし、

春の野に菫摘(すみれつみ)にと越(こ)し吾を野をなつかしみ一夜ねにけり

野遊に出て、とある家に一夜やどりしなるへし、野は、その家にたとへし也、二のをもじ、みな今のがにかへて解くへし、

同卷大伴宿禰家持春雉歌

春の野にあざるきゞすの妻戀におのかあたりを人にしれつゝ

至情のほどよみえて、千古不磨、情のわく時は、人にしらるゝのみならす、みつからう

ち出て、名のりもする也、常盤の子にひかれて、自あらはれたる類、世に多し、あたりは、春の野をうく、しれは、妻戀を承く、

同巻厚見王歌　王は聖武紀に無位厚見王等に従五位下贈らると見ゆ是也、

蛙鳴く神南備河に影みえて今や咲らん山吹の華

咲きたる後の景色を、さかぬ先にのべて、その時のいたるをまてる、面白し、一幅の畫也、古今集に「今もかも咲匂らん橘の小嶋かさきの山吹の花、また「逢坂の關の清水に影みえて今やひくらん望月の駒、是等を合せて、その巧拙を味ふへし、

夏

巻十七　歌の左に大伴宿禰家持作とあり、

青丹吉奈良の都はふりぬれともと杜宇なかすあらなくに

一意二轉、上の句は、下にかゝり、下の句は上にかゝる、妙々、ふり、もと、古都を寫す、古今集に「石ノ上古き都の郭公聲斗こそ昔なりけれ、調はよけれとも、曲折の妙は、これに及はす、

同巻同時の歌

杜若きぬにすりつけますらをの競狩する月はきにけり

すりつけは、杜若のしけれる中を、狩りゆくほとに、衣にすりつくが、すりつけたるやうになる也、さいひて、きそひ狩するさま見せたる、いとよし、ますらをは、たをやめに對する詞也と云り、競狩は、衣にすりつけに應し、月は杜若に應して、四月也、

秋

巻十七夕

天ノ河遠きわたりはなけれとも君か船出は年にこそまて

是も一意二轉の格にて、上の句は、下にうつり、下句は、上の句にうつる、七夕の星合によせて、相逢ふ事のまち遠き情を述へたるなるへし、遠きの詞、年にこそに對し、上下呼應、

巻二十大伴宿禰家持

宮人の袖附衣あきはぎににほひよろしきたかまとの宮

上下廻文の躰にて、斷るへく、斷るへからす、秋の野を詠めて思をのべしと見ゆ、袖附衣は、長袖也、唐詩、許渾の秋思に、琪樹西風枕簟秋、楚雲湘水憶同遊、高歌一曲掩明鏡昨日(さのふは)少年今(けふは)白頭、この詩と同意也

秋野には今こそゆかめ武夫の男女の花にほひ見に、

男花は、尾花、女花は女郎花をいふ、花の色を見に今こそゆかめと也、秋野の二字は、男女の花をよび出す、

巻八同人

さを鹿の朝立野邊の秋萩に玉とみるまておける白露

秋萩をいはんとてさをしかをいひ、白露をいはんとて、朝立といふ、清景身に逼る、

巻十七同人

けさのあさけ秋風さむし遠つ人雁がき鳴ん時近みかも

けさの朝氣、詞を重ねたるまて也、けふこの頃といふ類也、遠つ人、雁の故事なれは、冠詞に用ふ、時近みより、上の句にかへりて心うつし、

巻十鹿をよめる

山の邊にいゆく陰男(さつを)は多かれと山にも尾にも掉鹿なくも

上の雉歌と同意也、もの字、千金、

同巻田をよめる

掉鹿の妻よぶ山のをかべなるわさ田はからじ霜はふるとも

人倫のをしへこゝにあり、ありかたき歌也、

同巻秋花をよめる

眞葛原なひく秋風ふくごとにあだの大野の萩か花ちる

この歌、筆力雄壯、疾風知勁草の槩あり、なひくは、秋の字までかゝる、風はふくにかゝる、秋風、句中の追分也、

巻九弓削皇子に献る歌

さよ中と夜は更ぬらし雁かねの聞ゆる空に月渡るみゆ

月の傾くを見て、夜の更行くを知る、匠心婉曲、一幅の書景也、

巻十月を詠める

白露を玉になしたる長月の有明の月夜みれと飽かぬかも

長月、飽かぬ、相反して妙、

冬

巻十黄葉(もみぢば)をよめる

やたの野の淺茅色づく荒乳山みねの沫雪寒くふるらし

是は、野をみて山をおもひやる也、趣向は、上のさよ中と同しくして、彼は逆、是は順、順逆にかゝはらす、歌よむものは、常にこの趣を解して、よみいづへし、

同巻冬の雑歌

足引のやま路もしらす白橿(しらかし)の枝もとをゝに雪のふれゝぼ

山中雪にあへる也、ありのまゝにいひ出て、調おのづから高し、

相聞

男女兄弟のおもひあふ情をいひやる歌をこの中に收む

巻二大津皇子が石川郎女(いらつめ)に賜ふ御歌

足引の山の雫に妹待とわか立ぬれぬ山のしづくに、

石川郎女をまち給ひし事のありしなるへし、下、詞を重ねて、悟を盡す、古歌の躰也、

郎女かこたへまつれる歌

吾(あ)を待つと君か沾(ぬれ)けむ足引の山の雫にならまし物を

御歌を直ちにうけて、情をよせ奉りし也、

巻七草によせてよめる

歌集の題に、寄草、寄月なとかけるは、みなこのやうにうつしおくへきなり、草によするにあらず、草にことよせて、おのがおもひをのふるなり、そのうちにたとへの歌もあるへし、

月草に衣色どりすらめともうつろふ色といふか苦しさ

月草を、おもふ男にたとへし也、情はよすれとも、その心のうつろふといはるゝをいかにせんと也、上下照應、

同巻木によせてよめる

白菅(すけ)の眞野の榛(はり)原こゝろゆも思はぬ君がころもにすりぬ

ゆもは、よりもにて、よりもは、心にもと同意也、にといふ所によりといひもすれば、

よりもといふを、にもといふこともあり、今の詞にも、さる例あり、おもはぬ人にあひしをよめる也、世の中は、すへてかくのことし、おもふ人にあはす、おもはぬ人にあふそかし、

卷十夏、花によせてよめる

よそにのみ見つゝ戀ひなん紅の末つむ花の色にいてつゝ

末摘花は、呉藍の花をいふ也、とそ、是はたとへにて、あもふ人におはぬをいふ也、

卷十一物によせて思を陳へたる　これは、物によせての下に陳思の二字をかけり、これを略きて寄船寄弓なとかけるとおもふへし、

紅のすそひくみちを中におきて我や通はん君や來まさん

隣つゝきの人におくりし歌とみゆ、女のよめる也、すそひく道なれは、あまり狹き道にてもあるまじ、

卷十譬喩歌

橘の花ちる里に通ひなば、山郭公とよませんかも、

とよませんは、里通ひをうけ、山郭公は、橘の花を承く、忍ひがよひに、山郭公のどよもすを氣遣ふ也、これをたとへにして、意中をいへる也、

同卷夏鳥によせてよめる

郭公來鳴く五月の短夜も一人ねぬれはあかし兼つも

是は、短夜、あかし兼、相反す、

卷十一物によせて思をのべたる

足引の山鳥のをのしだり尾のながき長夜をひとりかもねん

白髮三千丈、緣愁若個長、是眞に古歌のめてたき者也、

卷三笠女郎か大伴宿禰家持に贈れる歌

道のくの眞野の茅原（かやはら）遠けれど面影にして見ゆてふ物を

眼に見ぬ所にても、面影にたてん、と瞑目冥思すれは、さる所と面影にも見ゆる、と人のいふ物を、まして相逢相睦ひて、厚き御蔭を蒙れる妾に於てをや、と見さる遠き所をとらへ來て、見たる人の近く面影にたつなるは、いふもさらなる物を、といへる、何等の深婉、家持卿の涙を水城の上にながされしも、うべなりや、

卷十一物に寄せて思を陳へたる

さひの隈檜の隈河に駒とめて駒に水かへ我よそに見ん

わが家の前なるひの隈河にだにも來て、馬に水かひ給へ、吾よそに見て、なぐさむへしと也、狹檜隅檜隈と重ねて、更に馬とめて、馬に水かへと重ぬる、歌の斤兩をさる、妙々、

卷十春、鳥によせてよめる

春されは百舌の草ぐきみえすとも我は見やらん君か當りは

草ぐきは、草くゞる也、上句は、見えすのたとへ也、

卷十二物によせて思を陳へたる

御獵する雁羽の小野の楢柴のなれはまさらで戀こそまされ

ならをうけて、なれといふ、なれは、その人に馴るゝ也、

卷六大納言大伴卿のこたへたる歌 笠郎女に答へしなり

益荒雄と思へる我や永莖の水城の上に涙のごはん

涙のもろき、中々に益荒雄なるべし、涙もなく、血もなき物は、眞の英雄にあらす、輕薄子也、抑是によりて、笠の女郎といふ女、人をして想像にたへさらしむ、

卷十八越前國椽大伴宿禰池主のおこせたる歌

相思はすあるらん君を怪しくも歎きわたるか人のとふ迄

是は家持卿に遣はしゝ也、かくおもふとも、しり給はじと也、歎わたる、相思はす、相呼應す、

卷七河によせてよめる

廣瀨河袖つく斗淺きをや心ふかめてわがもへる覽

廣瀨河を、人にたとへて、我に對す、淺は、ふかめてに對す、自怪しむ也、

卷十六葛城王陸奥國にまかり給ひし時、國司祇承いたりて緩怠なりけれは、王喜給はす、その怒、面にあらはれ、飲饌を設け奉りしかとも、召し給はさりけれは、前采女に、風流なる娘子ありて、左手に觴をさゝけ、右手に御酒をもちいてゝ、さて王の膝うちまゐらせて、一首の歌をよみうたひけれは、王の御意忽とけて、ひめもすのみ樂み給ひける、その歌

淺香山陰さへみゆる山の井の淺き心をわがおもはなくに

是歌、格別よしとにはあらねとも、右の事によりて、人口に傳はりぬれは、後の世には、難波津の歌と相並へて、男女の歌として、手習の初には、この歌を必すかゝせたるものなりしを、弘法か伊呂波歌出來し頃より、かゝずなりぬるは、いとわりなし、

羇旅

巻一文武天皇の吉野宮に御幸し給ひし時、長屋王のよみ給へる歌（長屋王は、天智天皇の皇孫にて、高市皇子の御子）

宇治間山朝風寒し旅にして衣かすへき妹もあらなくに

客中の苦によりて、故郷の妻をおもひ給ひし也、衣かす妹は、朝風寒しに應す、

巻十五天平元年六月、新羅へ行く仕人の、秋の頃つくしにいたりて、海邊の月を望みてよめる

夕されは秋風寒しわきもこが鮮洗ひぎぬゆきてはやきん

新羅へはやくゆき、はやく歸りきて、妻のときあらひ衣をきんとなり、情致可掬、是も鮮洗衣は、秋風寒しに應す

同巻同し仕人のつくしの引津(ひきつ)ノ驛(うまや)に船はつる夜よめる

天飛や雁を使にえてしがも奈良の都にことづけやらん

客中往々此情あり。またさる事もある也。唐岑參か詩に故園東望路漫々。雙袖龍鍾涙不レ乾。馬上相逢無ニ紙筆一。憑レ君傳語報ニ平安一といへるは。此京の使にあへるなり。

巻三柿本朝臣人麿

粟路(あはち)の野嶋(ぬしな)の崎の濱風に妹が結ひし紐ふきかへす

賀茂翁云、たゝ旅行の時の樣なるに、妹が結ひしと云る、少しの詞にて、えもいはぬ心も侍るぞかし云々、上句四言也、海の字落たるなるへし、濱風に紐吹返す、その寒おもふへし、

天遠(あまざ)かる鄙の長路ゆ戀來れは明石の門より大和嶋見ゆ

外國より歸りて、ふじの山を海上より見たる、今もこの情あるへし、喜悅の情をいはすして言外にあふる、

同巻同し人のつくしに下りし時、海路にてよめる

名細はしき稲見の海の沖の波千重にかくれぬ大和嶋根は

故郷の遠ざかりゆくさま、見るかごとし、中問、一篇の精采

巻二十常陸國防人梁田郡ノ上ノ丁(よほろ)大田部ノ三成か歌

難波門を漕出(で)てみれは神さぶる生駒高根に雲そたな引

近き生駒山も、雲にかくれて見ねずなりぬ、まして東の方をや、その心中おもふへし、

巻三柿本朝臣人麿、近江國より上りける時、宇治川のほとりにいたりてよめる

物夫の八十氏河のあじろ木にいさよふ波のゆくへしらずも

是は滿沙彌の歌と一意なるへし、世の中をわたるほとに、此情はふかゝるへし

巻七時に臨みてよめる、よみ人知らす

ことしゆく新防守(にひさきもり)か麻衣肩のまよひは誰か取りみん

かたのまよひは、衣のかたのやふれそこなひたるを云也、かたのやふれを誰かとりて繕はんとあはれみし也、今の士官に、この心の露だにもあらは、雑兵の歎も、けふのやうにはあるまじき物をとそ覺ゆる、

巻九天平五年癸酉、遣唐使の、難波を船出して、海にこぎいでぬる時、親のよみてその子におくれる、

旅人の宿りせん野に霜ふらば吾子(わかこ)羽くゝめ天(あま)のづるむら

親の至情を、天のむら鶴に託けて、もらしたる、多讀にたへす、

巻七羇旅歌

天きらひ日方吹らし水茎の岡の湊に波たちわたる

日方は、西風也、岡湊は、筑前國也、黒風白雨の吹立つ海上のすこき景色、見るやうなり、

巻三石川女郎歌

志加の海人はめかり塩焼いとまなみ櫛笥の小櫛とりも見なくに

自己を志加ノ浦の海人にたとへし也、仰事俯育のいそかしきさま、おもふへし、いとまなみ、一篇の眼目、

巻九石川大夫京に召されし時、播磨娘子か贈れる歌

君なくば何身飾らん櫛筥なるつげの小櫛もとらんともはず

毛詩に、伯の東にゆきしより、首飛蓬のことし、膏沐なきにはあらざれとも、誰をあるじとしてか、容づくらんと云るによく似たり、

巻十九天平勝寶二年七月十七日、少納言に召され、別の歌よみて朝集使椽久米朝臣廣繩か許に遣はしける、

いはせ野に秋萩しぬぎ駒なへて初鷹狩だにせでや別れん

心友に別るゝ時は、誰もこの情おこりぬへし、

巻七攝津歌

志長鳥猪名野を來れは有間山夕霧たちぬ宿はなくして

古を以の今をみれは、此間は全く天地反覆、今は煙の都となりぬともよみかふへしや、

巻一伊勢國に御幸ありし時、京に留まりて柿本朝臣人麿のよめる

あこの浦に船乗すらんをとめらが赤裳の裾に塩滿つらんか

土佐畫を見るが如く、千載の上のけしき、さながら目に映す、眞に是我邦の歌仙、

釧つく手節の崎に今もかも大宮人の玉藻刈るらん

たぶしは、後は答志とかきて郡名也、京に留まりゐてその日の時刻をおもひやる、美むかことく、恨むるかことく、妙は、説破せさるにあり、

潮さゐにいらごの嶋べこぐ船に妹のるらんか荒き嶋廻を

潮さゐは、みち來る潮のさわぎをいふとぞ、わぎ反しゐなり、是またかよわき女の船のりを氣遣たる也、始の歌は宮中の女をおもひ、中の歌は供奉の官人をおもひ、終の歌は供奉に加はれる身内の女をおもへる也、

巻一大寶二年壬寅、持統天皇の、三河國に御ゆきし給ひしとき、長岡忌寸奥麿かよめる

引馬野に匂ふ萩原入亂れ衣にほはせ旅のしるしに

上の句は、自也、下の句は、他也、自他重ねて、その様いと賑やかなり、賑やかなる歌よまん時の法とすへし、

同し巻譽謝ノ女王かよみ給へる歌

ながらふる妻ふく風の寒夜に吾夫の君はひとりかぬらん

右御幸のをり、夫の君の供奉し給ひしを、京に留ゐておもひやり給ひし也、貞女のはらわた可想、

巻四碁ノ檀越の伊勢國にゆきし時、留まれる妻のよめる、

神風のいせの濱萩折ふせて旅寝やすらんあらき濱邊に

濱萩折ふせてといひ、あらき濱邊に、といふにて、人家もなく、客中の苦さ、いはすして言外にあり、妙々、神風も、濱萩、あらきにひゞきて味あり、

巻一慶雲三年丙午、難波宮にみゆきありし時、志貴皇子の御歌

芦邊ゆく鴨のはかひに霜ふりて寒き夕は大和し思ほゆ

たゞ思郷の情をのべたるまてなれと、鴨のはかひといふによりて、寒一段つよきさま見えて、妙なる也、

巻三高市連黒人羇旅歌

櫻田へ田鶴なきわたるあゆち潟汐干にけらし田鶴鳴渡る

詞を重ねて、許多の曲折あり、佳々、人に指さして敎ふるを見るやう也、赤人の「和歌の浦汐みちくれはかたをなみ芦邊をさして田鶴なきわたる」是と異曲同工、雙幅に裝してかくへし、

四極山打越みれは笠縫の嶋漕かへる棚なし小舟

是また、歌中に畵あり、

同巻三田口巻人大夫の上野ノ國司にまかりし時、駿河國淸見崎にいたりてよめる

晝みれどあかぬ田子ノ浦大君のみことかしこみ夜見つるかも

みれどは、みれども〳〵〳〵の意也、忠臣良吏のはらわた、玆に至る、われよみて此歌に及ふ、覺す襟を收む、今時の俗吏、この心露もなく、任にゆくを、見物にゆくやうにおもへは、ゆる〳〵富士山もなかめ、田子の浦もみてゆく、名山勝浦を見たりとて、歌一首よみえす、かのこゝろなければ、この歌のいつるよしもなし、いかでこの歌を煎じて、日夜三服づゝ飲ませてしがなとおほゆる也、

遊覽

巻七山をよめる

古への事はしらぬを我みても久しくなりぬ天のかぐやま

古今に「我みても久しくなりぬ高砂の松も昔の友ならなくに、とよめるは、これをとれる也、我みてもの句、古への事云々をうけて、極て力あり、

同巻同しく

鳴神の音のみきゝし槇向の檜原の山をけふみつるかも

きゝし、みつる、相對す、また鳴神も檜原の山に映して、味あり、

巻三持統天皇の、雷岳にいでましゝ時、柿本朝臣人麿のよめる

すめろきは神にしませば天雲の雷のうへにいほりせるかも

意想天外、歌聖ならでは、いかでかこの歌をよみいづへき、是またすめろきは、神にましますといふ、宣命の現つ神といふに同しく、大和心の人ならでは、この語いでこじ、尚この人の「すめろきは神にしませは、眞木のたつあら山中に海をなすかも、とよめるも、同意にして、句格宏壯、風神絶世、

巻一天武天皇の吉野宮にいでましゝ時の御製

よき人のよしとよくみてよしといひしよしのよくみよよき人よくみつ

八個のよしの詞、蟬聯して下り、その煩をみす、疊詞の法とすへし、下の句、今のひとに令し、さらに古への人に轉し、咏嘆結をなしたる、何等の奇格、賀茂翁云、大かたの人の、大かたに見て、よしあしいふは、いふにたらす、よき人のしかもよく見て定たる物こそよけれ、何のうへにも、おもふへき也、といへる、さること也、

巻六山部赤人よめる

ぬば玉のよのふけぬれは楸生ふる清き河原に千鳥しば鳴

鳥啼山更幽也

巻九吉野の離宮にみゆきありし時の歌

落瀧ちなかるゝ水の岩にふれ淀める淀に月の影みゆ

清冷骨に沁す、

巻六紀伊國に聖武天皇の行幸なりし時、山部宿禰赤人のよめる

わかの浦に汐みちくれはかたをなみあしへをさして田鶴鳴わたる

かたをなみは、潟が無くなる故になり、秀歌には一辭の賛すへきなし、

同巻冬十一月、太宰府の官人等、香椎廟を拜み奉り、まかり歸る時、馬を香椎浦にとゝめて、各々懐をのべてよめる歌、帥大伴卿一首

いざ子ども香椎のかたに白妙の袖さへぬれて朝菜摘てん

貴賤の親睦、言外に見ゆ、

巻十九天平勝寶二年四月十二日、布勢湖に遊ひて、多枯浦に船とゝめ、藤花を望みて、各懐をのべたる歌、

多古の浦底さへにほふ藤並をかざしてゆかん見ぬ人の爲

婉麗如レ畫、

巻三山部宿禰赤人の、不盡山をみてよめる

田子の浦ゆ打出て見れは眞白にそふじの高根に雪はふりける

後人、此歌のゆもじを削りたる、すなはち語をなさす、また眞白にぞを、白妙のふじの高根に、と直したる、何そ拙なき、富士の高根に雪ふりてこそ白妙になるへけれ、白妙

のふしといひては、この白妙は、抑何の白妙ぞや、實際になきこと也、歌人ほと愚なるものはあらじと覺ゆ、この高朗絶妙の歌を直しけるゆゑ、かくは拙くなりぬる也、拙を直せは、巧にもなるべけれとも、巧なるを直せは、そのうらは拙き也、ましてこのやうの歌をや、

同巻不盡山をよめる

ふじの根に降おける雪はみなつきのもちにきゆれはその夜降りけり

此歌、不盡のけしきをよみつくして盡せり、是は赤人の歌にあらす、

巻五大伴佐提彦郎子、朝命を承りて、蕃國に使せんとて、船出しけるを、松浦佐用姫、山のうへよりその船望みて、別れをかなしみ、領巾ぬきてまねきつゝ、泣入りけれは、かたへの人、涙を流さすといふことなし、これによりて、その山を領巾振山と名づく、すなはち歌をよめる、筑前國守憶良大夫

遠つ人まつらさよ姫妻戀にひれふりしより負へる山の名

山の名をときあかせるまでなれと、つらねかたによりて、面白くきこゆる也、

巻九槐本歌 これは、氏斗をあげたる也、名はしれず、

細波や比良山風の海吹けは釣するあまの袖かへるみゆ

一幅の活畫

古京

巻一高市古人の、近江の舊き都をいたみてよめる

笹浪の國つ御神の浦さびてあれたる都みればかなしも

浦さひては、心をうらともいふ、こゝろのあらびすさひぬるを、しがの浦のさびしきにかけし也、是等もおのづから大和ごゝろの歌也、いさゝかも、漢意はまじらぬ也、

巻三柿本朝臣人麿の歌

淡海のみ夕浪千鳥ながなけば心もしぬに昔おもほゆ

心もしぬには、心も死ぬへきやうにと、いたりて思の深きをいへるなり、

巻六奈良の荒墟をいたみてよめる

紅にふかくそみにし心かも奈良の都にとしのへぬべき

あれたる都なからも、尚その地に年へて住ぬへく覺ゆるは、その地にふかくそみにし故

也、人情は古今をいはさる者也、

世の中を常なき物と今ぞしるならの都のうつろふみれは

奈良の都は、萬古遷らぬものとおもひし也、平安の都人も、江戸の士も、みなさおもひし也、

皇居

巻三太宰少貳小野ノ老(おゆ)朝臣

青丹よしならの都は咲花のにほふかことく今盛なる

今盛なる所、即今衰ふる所也、此歌、國家を保たんもの、寸時もわするへからす、花にいへたる、尤妙、

巻十七三香原の新京を讃めてよめる、右馬頭境部宿禰老麿

楯なへていつみの河の水尾絶えす仕へまつらん大宮どころ

楯なへては、いを射にみたる冠詞也、水尾は、水脈也、我邦の人、一人としてこの精神あらさるはなし、是この萬世一系の國體をなせる所也、支那人は、あげてこの精神なし、

是その革命亡國の衰運をいたせる所也、

巻六久邇の新京をほめてよめる、田邊福麿

をとめらが績麻（うみ）を掛くてふ鹿背（かせ）の山時の往けれは都となりぬ

東の夷のすめる江戸の、末終に都となりしも、この趣なり、何事も時節到來すれば、よくもあしくもなるもの也、上句暗に片田舎のさまを寫せる也、

雜事

巻十六佞人をそしる歌、博士濤奈（せな）ノ行文（ゆきふみ）大夫

奈良山の兒手柏の二面（ふたおも）にとにもかくにもねじけ人のとも

今の大臣も議員も皆この兒手柏の二面にて一面は大臣議員にして一面は佞人草賊なり、とそしらとゝ人なきにしもあらず

巻三沙彌滿誓歌　滿誓は、もと四位の右大辨笠朝臣麿が出家せし也とぞ、

世の中を何にたとへん朝開漕去（あさひらきこぎいに）し船のあとなきがごと

あさひらきを、あさほらけといへるは、平安朝後の詞也、と賀茂の翁いへり、またあとなきかごとゝいへるを、あとのしら波と直したるも、奈良朝の頃の歌には叶はす、此歌、世の無常を寫しえて妙也、

巻三天平十一年己卯夏六月大伴宿禰家持のなき妻を悲しめる歌

うつせその世は常なしと知る物を秋風寒し忍ひつるかも

うつせみは、うつしみの轉也、現身也、空蟬の意に非す、

巻一麻績（をみ）ノ王の、伊良古嶋に流され給ひし時、人悲みいたみてよめる、　王は、天武紀に、因幡に流され給ふとあり、それをきゝあやまりて、伊勢のいらご嶋としたるなり、

打つ麻（そ）ををみの大君海人なるやいらこが嶋の玉藻かります、

わくらはに、いらこの嶋の海人となり給へるよといたみし也、うつそは四言なるを、音引て五言にせる也、

麻績王きこしめしてこたへ給へる歌

うつせみの命を惜み波にぬれいらこの嶋の玉藻かりをす、

玉藻かりて、それをたうべて、命をつなぐと也、をすは、食ふ也、死ぬるは、やすし、

死に處するはかたし、

巻二有間皇子みつから悲みてよみ玉へる歌 有馬皇子は、孝德帝の御子にて、齊明帝の時、謀叛の事あらはれ、伊豫の藤代といふ所にて、失せ給へり、その時の御歌なり
家にあれは笥にもる飯(いひ)を草枕旅にしあれは椎の葉にもる

あはれなる御歌也、金殿玉樓のうちにすみ給へる御方の、一朝その宮をいで給ひて、旅の身にやつし給ふ時は、何れの御方も、このさまなるへし、家、旅、笥にもる、葉にもる、兩々相照す、

巻五聊私懷をのべたる歌、筑前國司山上憶良
天放(あまさか)るひなに五歳住ひつゝ都のてふり忘らえにけり、

都にすめは、都習にそみ、鄙にすめは、野習にそむ、それを習氣といふ、この習氣に心つくへし、都、鄙、相應す、

同巻松浦河にあそひてあへる女をとふにこたへし歌、
玉嶋のこの河上に家はあれと君をやさしみ顯はさす有き

君をやさしみは、君かやさしさにはぢてと也、これより後世はづることをやがてやさしといひなせり、

萬葉百首短評

娘等(をとめら)のさらにこたへたる歌、是は、憶良の、「遠つ人まつらの河にわかゆ釣る妹が袂を我こそまかめ」といへる歌にこたへしなり、
松浦河なゝせの淀はよとむとも我は淀ます君をしまたん、

我こそまかめといひし故、君をしまたんとこたへし也、今の知事にあたる人と、その所にすめる女との問答也、いかなる人の娘なりけむ、いとゆかし、

宴會

巻二十天平勝寶八年三月七日、河內國伎人(くれひと)ノ卿、馬ノ國人が家にて宴會の歌、散位寮散位馬史國人がなり、
鳰(にほどり)のおき長河はたえぬとも君にかたらんこと盡きめやも

たえぬ、盡きめや、相反す、是章法、

巻六冬十二月十二日歌舞所々にはやりて、諸王臣等葛井連廣成か家にて、とよのあかりし給ひし時の歌、あるじのよめるなり、宴會にもれたる人を、歌もてよひに遣はしゝなるへし、
我宿の梅咲たりと告やればこんてふに似たりちりぬともよし

古今に「月よゝし、よゝしと人に告やらば來てふに似たりまたすしもあらすは、これをされる也、くるといはゞ、それでよしとも也、何等の澹泊、（梅見にこそいふが、興あるとなりちりぬとも、何かせん）

卷三大網公、人主の宴にうたへる歌、（古人の歌をうたへるなり）

須磨の海人の鹽燒きぬの藤衣まどほにしあれは未たきなれす、

このあるじの在所と、程隔ぬれは、かうやうの宴會に、たひ／＼來なれぬがうらめしと、古歌をうたひて、その意をのべし也、今も宴會に、その時の興にあひたる歌をうたひて酒をすゝむる類也、人主はさる人の名なり、

賀

卷八春雜歌、志賀皇子の悅の御歌、（皇子は、天智帝の第七の皇子なり、）

石走る垂水の上の小薇の萠出つる春になりにけるかも

御出世をよろこひ給ひしなるへし、この皇子の御子の、天皇になり給へる頃の御歌にてもある歟、

卷十八陸奥國より金出づるをいはひ給へる詔書の歌、大伴宿禰家持卿のなり、

すめろきの御代榮えんと東なる道の奥山にこかね花咲

花咲、御代榮えん、上下呼應、一讀瑞雲の筆端を遶るを見る、

是は加茂の翁のえらはれし新採百首をよみてふと短評を加へしなり、委はしきは本書にゆづりて註さす

明治三十八年春三月洛北紫林櫻樹が下にて一校了

萬葉百首短評　終

新百人一首偶評

序

百人一首とて、大津ノ宮のそのかみ、かりほの露の古言より、初て、承久の百敷の軒、忍ふの言の葉に至るまて、遠く世の中に傳れるは、京極中納言のおのか山里の障子に書置かれけるを、今の代までの玩とせるならし、しかあるを、此頃柳の糸のよりよりに、その外の歌仙の歌ともを、更に色異なる紙どもに書出しまし〱たるを、見奉るへき由、仰事侍りし御筆の、勢すみつき、此世の物とも見えす、目なれぬ様など、心詞も及がたく、是そ千歳の寶に侍るへき、と愚なる心の中にも、有かたく思奉りて、さるは撰出されたる趣も、比ひなく、めてたき御事に侍れは、ひろく末の代にも傳へまほしくて、御中書を申出てゝまかてたりし、是もまた石の文箱、壁の中にもをさめおき侍らは、たやすく開見るへきにしもあらされは、更にかたのやうに寫しおきて、是を明暮枕本にすへしとてなり、

小倉山時雨ふりにし古の跡にも越ゆる言の葉ぞ是

文明十五年神無月下四日燈の下にて筆を染了ぬ

右は、僧道興が序にて、扶桑拾葉集にも載給へり、

沙門花押

新百人一首偶評

稼堂陳人偶評

常徳院殿足利義尚公選

文武天皇

龍田河紅葉みたれて流るめり渡らは錦中や絶え南

渡らばは龍田河、錦は紅葉、中は流、絶は錦を受け、連珠章を成す、此御製は、圖題なるへし、

聖武天皇

妹に戀ひ吾の松原みおろせは潮干のかたに田鶴鳴渡る

妹に戀ひは、吾の冠詞也、汐みちくれはかたをなみの歌と同一の筆法

大織冠

玉くしげ御室戸山のさね葛さねすは終に有とみましや

上の句は、下の句さねすの序也、さねずは寢ず也、夫婦の契したる時の歌なるへし、

式部卿宇合

山城の岩田のをのゝはゝそ原見つゝや君か山路こゆらん

旅中の愁況、見つゝの詞に宛然たり、山路は、岩田を承く、

源　當純

谷風に解くる氷のひまことに打出つる浪や春のはつ花

花の下に、ならんの詞を加へて見るへし、やとかゝりて、名詞にて留めたるは、みな此格也、春風春水一時來の景趣、眼前にあり、

藤原菅根朝臣

秋風に聲を帆にあけてくる舟は天の戸わたる雁にそ有ける

「秋風に聲を帆にあけてくる雁は、天の戸わたる舟とこそ見め、とよまはいかに、讀者必す辨あるへし

亭子院

立歸り千鳥なくなる濱ゆふの心隔てゝおもふものかは

濱ゆふは、濱おもと　といふ草也、廣東新語に、文珠蘭と見ゆる是なりと云り、實の隔りてたるもの故、心隔てゝといはんために云るなるへし、上の句は、全く序なから、立かへりなといふは、心をかけて、また遠々しくなる意を見せたるなるへし、さらでは、いたつら詞也、

忠義公

身のうさを思ひなりぬる物ならはつらき心を何か恨みむ

忠恕の意なるへし、身のうさは、我也、つらき心は、人也、うらみうさ、上下呼應す、

清愼公

池水に國榮わたる卷向の玉城の風は今も殘れり

池水に風のわたれるけしきに、昔のなごりありとなり、是は懐古の歌なるへし、

忠仁公

歳ふれは齡は老ぬ然はあれと花をしみれは物思ひも無

歳々年々人同しからされとも、年々歳々花相似たり、殊に花には心なし、人を慰むる所

以也、枕上一枝の梅、楚々人を動かすを見て、此歌の風情を味ふへし、然はあれと、一首の關捩子、

中納言長谷雄

我爲は見るかひもなし忘草わする斗の戀にしあらねは、

爲の下ににもじを加へて見るへし、且連叙にして、中間忘草わする斗、頂針妙、

大伴紀主

神無月しくれにあひぬ紅葉の吹かは散なん風のまに〱

あひぬと句を切たる、わろし、しくれにあへる、とあるへき也、風のふくまに〱、紅葉のちりなん、とをしめるなり、

八代女王

みそきする檜の小川の河風に祈て渡るしたに絶えじと

上の句に、下の句の序也、檜の小川は、山城也、心の下に夫婦の中たえじ、と祈て世をわたると也、祈の字は、みそぎ、渡るは、風、したは河に應す、古今六帖に、祈りぞわ

たるとあるを、祈てとしたる、その頃の體なるへけれと、趣味索然たり、

大納言旅人

いさや子等香椎の潟に白妙の袖さへぬれて若菜摘てん

香椎は、つくしの名所にて、その潟邊也、白妙の文字に、雪をかくしたる、妙々、衣に雪のふりかゝつて、しろくなれる、そのうへに、またその袖をぬらしての意、さへの詞にて見えたり、早春泡雪のふる頃、冠者五六人打連れて、若菜つみにゆくさま、古人の元氣想ふへし。

僧都玄賓

山田もるそほつの身こそ悲しけれ秋はてぬれは問人もなし

そほつは、今のかゞし也、そほつは、濕るゝをいふ、露にぬれて、田畠にたてる故、名とせる也、今それに音の似たれは、僧都を案山子に比して云る也、玄賓は、河内の人にて、道鏡に汚されす、遁世して備中ノ國にゆき、田夫の爲めに鹿を逐ひしといふ、その比の詠なるへし、後、弘仁九年六月、湯川寺にて寂す、年八十、つら〱此歌を案するに

中に大議論あり、盖、士の上に仕ふる、用のある時は、下にもおかす、用のなくなる時は、すてゝ顧みす、古往今來、みなかくのことし、玄賓の勇退高踏、尤もとおもはる、かの范蠡か功成り名遂けて、五湖の舟に棹さしゝも、佐々木高綱か宇治川先陣の後、高野の雲に入りしも、みな世態人情を明にして、未練を此世に遺さゞりし也、尊ふへし、仰くへし、

源信明朝臣

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹下す山おろしの風

高調絶世、地に擲てば、金石の聲を發す、

藤原忠國

我ならぬ草葉も物は思ひけり、袖より外におけるしら露

袖の字は、我を受け、露の字は、物思ひけりを受く、袖より外、庸筆の及ふ所にあらす、此歌、通篇草葉の上に就て、叙し去り、我身上に就ては、僅に我袖の二字を点するのみにして、彼我の兩意明なり、何等の妙腕、

増基法師

神無月しぐれ斗を身にそへてしらぬ山路に入るそ悲しき

時は神無月、所は山路、身にそふ物は、しくれの雨のみ、その悲歎おもふへし、しくれ斗、妙、

藏內侍

誓ても猶おもふにはまけにけりたが爲めをしき命なるらん

命ををしむまじと誓ても、猶世をおもふ心には負くる也、そも〳〵誰か爲めにをしむ此命なるらんと也、盖身を處するはやすし、世を處するは難し、只祿を貪り位を窃む者の、これをかりて逃辞とする、憎むへし、命の字誓に應す、

源順

老にける渚の松の深緑しづめる影をよそにやはみる

此歌、嚴穴の士を愛するにたとふへし、今年一月、理學博士、伊藤圭介翁九十九歳にて歿す、瞑目すときゝて、俄に華族に列す、此歌をみて愧死すへし、事こそかはれ、九十

九歳の老儒をよそにみたる、その罪逃かるへからす、

平　祐　擧

胸はふじ袖は清見か關なれや煙も浪もたゝぬ日そなき

句法は味ふへし、句調は陋なし、

安　貴　王

秋立ていくかもあらねとこのねぬる朝氣の風は袂涼しも

朝げ夕げなといふは、朝食夕食也、それを後には、たゝ朝夕の義にも用ふる也、こゝはそれ也、すゝしもは、すゝしくある哉也、「春立つといふ斗にや三吉野の山も霞みて今朝はみゆらん、と春秋の双璧

藤原爲頼朝臣

覺束ないつこなるらん蟲の音をたどらば草の露や亂れん

蟲もゆかしく、露もをし、やさしき歌也、

具平親王

世にふるは物思ふとしもなけれとも月にいく度なかめしつらん

上句、わか身世にふることは、物かなしくおもふとには、あらねと也、實にも月みれは千々に物こそかなしけれ、月はふるを受け、なかめは物おもひに應す

藤原仲文

有明の月の光を待つほとに我世のいたく更にけるかな

有明の月を待つほとに、夜のいたく更ゆくに、おのれの時を待ほとに、身のいたく老たるをたとへし也、感慨無限、

横　忠　幹

わするなよ程は雲ゐになりぬとも空ゆく月の巡りあふまで

人に契りし也、雲涯萬里に隔つとも、まためぐり逢ふまて、我をわするなよと也、わするなよ、一首の眼

山田法師

吉野山紅葉の色やいかならん余所の嵐の音そはげしき

此によりて彼ををしむ、風神絶世

安法々師

世を背く山の南の松風に苔の衣や夜寒なるらん

世を背く云々は、もろこし終南山にこもりし人の故事によるなるへし、法師の歌としては、味氣なき歌也、

藤原惟盛

しばしまてまだ夜は深し長月の有明の月は人まとふなり

長月の有明の月に、夜はあけぬ、と人のまどひて歸へらんとするを留めて、しはしまて、また夜は深しと云る也、有明の月はのはもじの上に、にもじを加へて見るへし、

善滋爲政朝臣

郭公鳴くやさ月にうゑし田を雁かねさむみ秋そくれぬる

郭公のなく皐月にうゑし田のもの雁が音さむく秋そくれぬる也、田をかるをかりにかけたる也、さむみのみは、寒くある故にの意也、たゞさむくとあるへき也、秋、さつき相

對し、郭公なくに、雁か音相映す、

三條院女藏人左近

大井川杣山風の寒けれはたつ岩波を雪かとそ見る

雪の字、寒に應す、たゞ寒けれは、波を雪とみるといふ迄なり、

沙彌滿誓

世の中を何にたとへむ朝ほらけこぎゆく舟の跡のしらなみ

世の中の果かなきを、舟行の痕なきにたとへし也、此歌奈良朝の歌を全く平安朝の歌にしなしたり

藤原長能

あられふるかたのゝみ野の狩衣ぬれぬ宿かす人しなければは

宿かす人のなければは、あられに狩衣のぬれたると也、古人のやさしき所おもふへし、今の人は、時の官人なと、狩にくれは、人走らせてもてなす、官人も人を驅て宿をとる也、上下の位におごり利にわしる、これらに比ふれは、いかにぞや

し也、いかでは、願ふ意也、謝安世に出でずば、この蒼生をいかにせん、と唐土人のいへるに同じ、

馬　内　侍

今宵きみいかなる里の月をみて都に誰をおもひいづらん

三五夜中新月色、二千里外故人心、月をみて誰を都におもひ給ふぞと也、都、里、相對す、

藤　原　元　眞

涙川身もうくばかり流るれどきえぬは人のおもひなりける

おもひのひを火に見たてたる也、思の火、涙の水、相應す、

花　山　院

秋の夜の月に心のあくがれて雲ゐに物をおもふ頃かな

あくがるゝは、うかるゝ心也、雲の上にまし／＼ても、猶雲ゐに物をおもひたまふ、うへにもうへはあるものかな、

藤原範永朝臣

有明の月も淸水に宿りけり今宵はこえじ逢坂のせき

月も淸水にやどりければ、吾も逢坂の關はこえず、茲に一夜やどりて名所の月を詠すべしと也、古人風流想ふべし、此歌、一頭兩脚の結構にして、こえじは宿りに應じ、逢坂の關は淸水に應ず

堀河右大臣

さくら花あかぬ餘におもふかなちらずば人やをしまざらまし

ちらずば、人もをしむまとじおもふも、あかぬあまりにおもふ故也、かしこき人も、世にあるほどは、誰人もあかねど、さすがにありかたしともおもはぬ者也、さてその人、一朝世を去れは、俄にその人のしのばるゝは、花のちりて、一きはをしまるゝがごとし、

大納言公實

思ひあまり岩のかきこむ奥山の谷の下水いかでもらさん

世をおもひあまりて、山にこもる人を、世に再出さまほしといふを、谷の下水にたとへ

源　道　濟

思兼別れし野邊をきてみれは淺茅か原に秋風そふく

古道少人行、秋風動禾黍、一讀悽然

土御門内大臣

朝ごとに渚の氷ふみわけて君に仕ふる道ぞかしこき

今日此歌中の人なし、世の日におとろふる所以也、吾第五高等學校にありて、毎朝霜をふみて出づるによめる、「霜ばしらふみさく沓の音たかく人よりさきにゆくは誰が子ぞ、

太宰大貳高遠

逢關の岩角ふみならし山たち出づる霧原の駒

桐原は、信濃の牧也、昔信濃の國より馬を献つらんとて、逢坂の關こえて、都に登る、それをよみしなり、氣象雄快、千載その音をきくがことし、眞に是武人の口吻、

源　頼　實

木の葉ちる宿はきゝわくかたぞなき時雨するよも時雨せぬよも

絶妙の好辭、千古不磨

橘　爲仲朝臣

あやなくもくもらぬよひを厭ふかな忍の里の秋のよの月

秋の月は、くもらぬをこそめづべきに、今は忍ふのかよひなれは、わりなも、くもらぬよひをいとふ也、忍の里に、忍の意をいひかけたる也、この字、眼、あやなくもは、文理なくもにてわけなし也、

修理大夫顯季

しぐれつゝかつちる山の紅葉をいかに吹くよのあらしなるらん

かつは、つゝの意にて、しぐれにそまりつゝちる也、此歌、無限の感慨、蒲生氏卿の、譏にあひて、自害せらける時、「限あれは吹かねと花はちるものを心短かき春の山風、とよまれたる、これと異曲同工、筆下有涙、

白　河　院

庭の面は、月もこぬ迄なりにけり梢になつの陰しけりつゝ

つゝはしげりつゝ月をかくすの意也、陰しげりは、月もこぬに、返應す、夏の梢の陰といふへきを、梢に夏の陰とよみ給へる、詩文には、このやうの工夫なかるへからす、

神祇伯顯仲

鷗ゐる藤江の浦の沖出づる夜舟いさよふ月のさやけさ

月のさやけさに、沖いづる夜舟のしばしいざよひて詠めやるさま、寫得て書趣あり、いさよふは、しばし休らふ心也、十六日の月を、いざよひの月といふも、月のすこし休らひて出づるよりの名なれは、こゝも、舟もいざよふいさよひの月の意なるへし、

後九條內大臣

あらし吹ゆづきが嶽に雲消えてひばらの上に月渡る見ゆ

ゆつきか嶽、ひばら、皆大和の名所也、絶景寫得て絶妙、且嵐吹、月渡、順逆相喞、味者不知、

三條入道左大臣

急かれぬ年の暮こそ哀なれ昔はよそにきゝし春かは、

年老ぬれは、何事もこゝろなくなりて、來る年も急かれぬこそ、げにもあはれなりけれ、老境寫得て亦絶妙、

法性寺入道前關白家堀河

契りおきし人もこすえの木の間よりたのまぬ月の影そもりくる

契りし人も來すといふを、木すえにかけし也、おもふ人は來す、たのまぬ月は來る、人世の不如意、みなかくのことし、此歌、曲折乃ち章を成す、且起結照應して、月のもりくるをにくみたる、おのづから人まつ女の口吻、

瞻西上人

いほりさすならの木陰はもる月のくもるとみれは時雨ふる也、

庵の戸さしこめてすめる楢の木陰は、もる月のくもるとみれは、あらしに木の葉のしぐれふると也、時雨は、楢の木陰に應す、山中の秋のけしき、一讀冷然たり、

僧都清胤

君住まばとはまし物を津の國の生田の杜の秋のはつ風

今は君すみまさぬ故に、とふよしもなし、と、うらに含みて云る也、

登蓮法師

歸りこんほとをや人に契らまし忍はれぬへき吾身ならせは、

これも、その意のうらを云る也、上の句は、下の句よりかへりて見るへし、

從三位頼政

淡海のや眞野の濱邊に駒とめて比良の高峯の花を見る哉

田子の浦ゆうちいてゝみれはの歌、と同一の筆法にして、清空一氣、萬遍いとはす、

左近衞中將公衡

狩暮し交野の眞柴折敷て淀の河瀬の月を見るかな

武人の風流、武備ある者は、必文事あり、とやいふへからん

大炊御門右大臣

我戀は千木のかたそきかた頼み行あはで年のつもりぬる哉

千木は、神社の風木也、かた／＼そぎたる物なれは、かたそきと云、片そきのやうに、

かた／＼のみ頼みて也

大宰大貳重家

後の世を歎く涙といひなして栞やせまし墨染の袖

後の世を歎く涙にそめしといひなして、墨染の衣をきて道、のしるべすへしと也、世を逃れし時の歌と見ゆ、

寂然法師

秋も來ぬ年も半に過ぬとや荻ふく風のおとろかすらん

上下の句法、緩急相用ひていとよし、

刑部卿範兼

月待つと人にはいひて詠れと慰めがたきゆふくれの空

外よりみれは、風流のやうなれとも、そのうらをみれは、鈍賊なり、今時の歌よみには、この鈍賊多し、

大江惟順女

忘らるゝ浮名はさても立にけりこゝろの中はおもひわけども

こゝろの中には、分別ありての事なれども、あたしの人には、薄情ものよとわするゝうき名のさても立けるくやしさよと也、

後德大寺左大臣女

椎柴の露けき袖は棚機もかさぬに付けてあはれとや見む

是は喪中の歌なるへし、椎柴の袖は、喪服を云也、喪服には、しひの色を用ふと云り、已に喪中なれは、棚機姫も衣かさす、衣の袖も涙の露に朽ぬくきを、見る人もあはれとやおもはんとなり、

前大納言忠良

山深き草の庵の夜の雨に音せでふるは涙なりけり

山深き草の庵にふる雨の、音するは、空の雨、音せぬは涙、この兩意は、はもじにて見ゆる也、

鴨長明

石川や瀨見の小川の清けれは月も流れを尋ねてぞすむ

石川瀨見の小河は、加茂川の異名也、月も我も、清流を尋ねてすむと也、石川、瀨見、清し、月、流、すむ、字々句々、一点のちりなし、されとも、尋ねぬ月を尋ぬと見るは、長明の我意なり、畢竟長明は野狐禪なり、

中納言國信

春日野の下もえわたる草の上につれなく見ゆる春の泡雪

つれなくは、强情也、春陽來復、草も下もえわたるに、猶强情にも、あわゆきのふる、古今醜類の廟堂にたちて、賢路を妨くるにたとへつへし、

後久我前太政大臣

武藏野はゆくへも秋のはてそなきいかなる風の末に吹くらん

下句、いかなる風の野末に吹くらんの意なり、末の字、武藏野を承く、寥廓の景色宛然たり

藤原秀能

袖のうへに何故月は宿るぞと餘所になしても人のとへかし

余をよそになしても、人のとはゞ、涙の露に月の宿るなる、とこたへんものをと也、あはれなる歌なり

大藏卿有家

春雨の遍き御代を賴むかな霜に枯ゆく草葉もらすな

雨露私なし、この老ぼれをも、もらさす惠給へかしと、君に願をかけし也、霜は雨、枯ゆく草葉は春、もらすなは、あまねきに映帶す、昭明融あり、終を令(よく)して可なり、

大納言通具

影淸き蓬の洞の秋の月しもを照らさばすてずもあら南

蓬洞は、仙人の住居をいふなるへし、したといふへきを、しもといへるは、霜はしたにおく物なれは、云かけしなるへし、大意は、蓬洞の月、我をもすてす、てらしてしがなと、月に願をかけたるにて、その人の世に用ひられすして、世を逃れんの意、言外にあり、

八條院高倉

浮世をはいつる日ことに厭へとも、いつかは月の入るかたを見ん、

浮世をいとへども、さりがたく、往生は願はしけれとも、なりがたし、世を出つるは自、月のいるは他、出入相反し、自他相救ふ、且上句は現在、下句は未來、未來は反叙、現在は正叙、中間ども詞を以て、斡旋す、神來の章法といふへし、

右大將賴朝

陸奥のいはでしのふはえぞしらぬ、かき盡してよ壺の石文、

いはて、しのふ、みな陸奥の名所也、えそは、蝦夷也、壺の碑は、神亀元年、大野朝臣東人の多賀城にたてし碑なり、此歌は、新古今雜部に見えて、前大僧正慈圓、文にておもふほとのことも申盡しがたきよし申遣して侍ける返事に、とあれは、いはずしてしのぶとも、こなたはえしらねは、書盡しておこせかしといふ意を、二つの國名、二つの地名、一の物名にいひつらねて、あやなせるなり、えぞしらぬは、今の俗言に、ようしらぬといふ是也、ようは、えの音便也、かの李白か蛾眉山月の歌に、五ヶ所の地名をよみいれたるとその巧を爭(あらそ)ふへし

勝命法師

雨ふれは小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて

さつきの頃、雨ふれは、水ひく用もなけれは、雨休といひて、今も農民の休むこと也、それをよめる也、暇あれやに、けふはのどかに休みくらせるの意を含めし也、苗代水は、小田を承け、空の字は、雨を承けて、筆力萬牛を挽く、

皇后宮太夫俊成女

夢かとよ見し面影も契しも忘れずながらうつゝならねは

面影も契も忘れずおもへとも、うつゝならねば夢かとよとなり、うつゝ、夢、起結呼應

小侍従

樒つむ山路の露にぬれにけり曉起のすみぞめのそで

世を逃れて山にすめる情況を、ありのまゝによみ出たるさま也、いとよし、殊に世捨人となりても、毎朝の勤に怠らす、曉起樒をつみて佛に供する、殊勝なる心、後世惰夫の鑑なり、曉の字、露を受け、袖の字、ぬるゝを承く、

後鳥羽院宮内卿

きくやいかにうはの空なる風だにも待におとづるならひありとは

うはの空なりとも、問へは誠となるへし、まして待つ者を音信るゝは、人情にて、昔よりの習はしなるを、君きくやきかすや、おとつるはおとつるゝといふへし、詞遣違へり、此歌、末世の針砭、

中宮太夫師中

山里の稲葉の風に寝覺して夜深く鹿の聲をきく哉

たゝ歌のやうにて、たゝ歌ならす、哉の字、着眼、稲葉の風に寝覺して、深更鹿の聲をきく、さて／＼下民の田わさに心を苦しむることいかにぞやの意、此一字にあり、古人の詞を苟も下さゝること、みなかくのことし、

藤原資家朝臣

筏師よまてこととはん水上はいかはかりふく峯のあらしぞ

花紅葉のおびたゝしくちりて流るゝを見て、筏しにことゝふ也、その花紅葉を、何とも

いはで、峰のあらしにてしらせたる、影寫の手段妙々、且上句急にして、下句緩、相配して風調いひがたし、

法橋行遍

あやしくぞ歸へさは月のくもりにし昔かたりに夜や更ぬらん

歸へさは、はかへるさの意なるへく、下の句より上の句に返りて心得へし

正三位知家

淺茅原色かはりゆく金風にかれなで鹿の妻を戀らん

かれなでは、その所をはなれずての意也、人の心の淺茅原、色はかはれど、鳴く鹿のふかき情は、かれはせぬ、人もかくこそあるへけれ、かれなで、かはり、上下反映、

惠子內親王

皆人の背きはてぬる世ノ中にふるの社の身をいかにせむ

皆人にすてられて、世をふるを、いかにせん、といふを、布留ノ社にかけし也、布留社は、大和也、

宜秋門院丹後

山里はよのうきよりも住わひぬ殊の外なる峰のあらしに

是等の歌、いひかひなき歌なれとも、女性なれはゆるすへし、峰の嵐、山里を承く、

從三位行能

かきながすことの葉をだに沈むなよ身こそかくてもやま川の水

かきなかす詞をだにもしづむるな、此身こそ沈むとも、此念はやまぬぞといふを、山川にかけし也、かくてもは、沈むをさす、士は沒して名の傳はらさるをしむ、誰もこの志なかるへからす、

源季景

同しくはあはれいにしへ思出のなけれはとてもしのはすも無

初句、いつれとならは、同しくはあはれとおもへの意歟、さるにても、詞たらで、意明ならず、あはれ古への思出のなけれはとといひても、忍はすしもあらねは、君も同しくは哀とおもへ、と上に返りてみるへきにや

平忠度朝臣

頼めつゝこぬよつもりのうらみてもまつより外の慰めそなき

たのめは、頼ませ也、つもり(津守)のうらは、和泉の名所也、今それを來ぬ夜のつもるをうらむといふにかけたる也、契りし人の來ぬを恨みてもせんなし、たゞまつ外の慰はなしとなるへし、猶本書を引てみるへし、

前大納言爲家

足引の山の山鳥をのへなるはつをのたれをながく戀らん

はつをのたれをは、極尾(はつを)の垂尾(たれを)の義にて、山鳥の尾の長きをいふ也、それを誰を長く戀て鳴くらんといふにかけたる也、

藤原隆祐朝臣

夕日さす遠山本の里見えて薄(すゝき)吹しく野邊の秋かせ

荒涼の景色をよみたる、有聲の書といふへし、

藤原光俊朝臣

いかにせん死なばともにとおもふ身の同しかぎりの命ならねば

人の先たちて死ぬる時は、誰もおもふ所を、事もなくいひつらねたる、いと〳〵めてたし、

入道二品道助親王

萩の葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし

「世の中に、たえて櫻のなかりせは、春の心は長閑からまし」と相對して、亦是春秋の雙美、

高辨上人

松の下岩根の苔にすみ染の袖のあられやかけししら玉

墨染の袖のうへにかゝる霰や手にかけたる白璧の數珠といへる、何等の高風、是をみば富貴の念も自ら春の氷のごとくなるへし、かけしはかくるとあるへきにや、

藤原雅顯

里の海人のかりそめなりし契よりやがてみるめの便をそ思ふ

ふとしたるより、ふかき中となりぬるは、みな此類也、海人のみるめを刈るといふを、譬にして、意中を述へたる也、

藤原信實朝臣

仕へ來し我道芝の冬枯に迷はん跡の名こそつらけれ

功成て身退くの意也、年老て少年にたちましはり、人にわらはれん跡の名こそつらけれと也、げにもすることといふこと、みな兒戯の世の中に、かゝづらひて枯はてんこそ口をしきわさなれ、來しの字より道の字を出し、道よりしばを出し、芝より冬枯を出し、遂に跡の字にて上の字ともを、悉く結ひたる、極て力あり、迷の字、着眼、萬事迷也、

從二位成忠王

夢とのみおもひなりにし世の中を何今更に驚かすらん、

驚かすの字、夢の字に應して、その意明也、大丈夫の歌也、

安嘉門院四條

先の世に誰が結ひけむ下紐の解けぬつらさを身の契とは

とはの下に、あはれなやなといふ意を含めし也、下紐は女の裳の下にむすふ帶をいふ也、男女の契するに、その帶のさきを結ひおくこと、むかしのならはし也、前世に誰か結ひけん、しらねとも、その結ひたる下紐のとけぬ斗にて、終にあふことも叶はぬ、そのつらさを、僅にわか身の契とせんとは、情なきことならすや、となり、

天台座主澄覺

荻の葉に有ける物を花故に春もうかりし風の宿は

花咲く故に、春もうかりし風の宿りは、荻の葉の上にこそ有へき物を、今は何とてわか身の上に有けるか、とかこちたるなるへし、

光明峰寺前攝政左大臣

神代より道ある國に仕へける契もたえぬせきの藤川

國道ありて奉公の契たえたる、いとあはれ也、藤河の字、契も絶えぬに應して味あり、

常盤井入道前太政大臣

裏枯るゝあしの末葉に風過て入江をわたる秋のむら雨

秋風のざつとふき過きぬと見るまゝに、はや入江を村雨のわたる、眼前の景趣、寫得て畫のことし、趙迪が晩眺に白雲深處野人家。倚杖間吟日未斜。江上數峰看不盡。晩鐘殘雨入蘆花。是とよく似たり、

中務卿宗尊親王

いつよりか秋の紅葉の紅ゐに涙の色のならひそめけむ

紅涙千行、世を嘆給ひし時の御歌なるへし、かとかゝりて、けむと給ふ、一氣呵成、句讀すへからす、

土御門院

秋の色を送迎へて雲の上に馴れにし月も物忘れすな

是は阿波に遷り給ひての後の御製なるへし、物忘れと宣ひし、妙也、一盛一衰に付て、人の疎くなりゆくは、殆と健忘のことし、秋色の二字、下句の月を呼起す、

後嵯峨院

有明の空に別れし妹か嶋かたみのうらに月そ殘れる

妹嶋、かたみの浦は、紀州の名所也、有明の空に別れし妹の形身は、只あとに殘れる月のみ也、といふを、名所にかけ給ひしなるへし、月の字、有明に應す、

伏見院

忘れずよみはしの花の木の間よりかすみて見えし雲上の月

御位を下させ給ひし後むかしをおもひやりて、よみ給ひしなるへし、起首一句、精神あり、雲の上みはし相呼應す、

花園院

芦原や亂れし國の風かへて民の草葉も今靡くなり、

此御製は、北條高時も誅に伏して、後醍醐帝王政復古の御時、よみ給ひしなるへし、草葉は、蘆原に應し、靡くは國の風に應す、且亂の字を以て、高時の暴をあらはし、靡の字を以て、後醍醐帝の仁を寫す、かへての字、今の字、尤力あり、蓋高時の時は、民その暴になひき、中興の時は、民その仁になひく、風は同しけれとも、その暴仁は、かはる也、故に、かへて、今と、の給ひしなるへし、

此撰は、文武天皇の御製を以て起し、花園院の御製を以て結ふ、紅葉のみたれ、蘆原のみたれ、起結照應、一治一亂、終に治に歸して「筆を留む、妙選、

後選百人一首評註